黙示録～反逆しない軍人～

RYUZEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黙示録～反逆しない軍人～

【Ｎコード】
Ｎ６３６７Ｗ

【作者名】
ＲＹＵＺＥＮ

【あらすじ】
世の中には明らかにならない事がある。歴史から忘れ去られ、隠蔽され忘却された本編に記されることのなかった黙示録。これはそんな葬り去られた筈のストーリー。……とまあ格好よく書いているだけで、要は『反逆しない軍人』の外伝です。最終話後の世界や、本編で描かれなかった話等々を適当に投下していきます。
【コードギアス逆襲のレナード】
もしも本編が原作準拠で進んでいた場合のＩＦストーリー。ゼロレクイエム後、徐々に平穏を取り戻した世界。民主制に移行しようと

するブリタニアに待ったをかける男達がいた。変わりゆく世界に否と唱え、騎士は時代を逆行させるため剣をとる。魔人による逆襲戦争が始まった。

SECRET1　　エピローグ

皇歴２０２１年１１月８日。
世界一の超大国たる神聖ブリタニア帝国の頂点に君臨する男、第９９代皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは帝都ペンドラゴンで来年の１月に一般公開される予定の博物館に非公式に訪れていた。
歴史上ブリタニアの第九十九代皇帝は二人いるが、そのもう一人の就任を認めないという意味での第九十九代皇帝である。
傍らには護衛であるナイトオブトゥエルブ、モニカの姿がある。

「お待ちしておりました、皇帝陛下」

「ああ。今日は宜しく頼むぞ。クルーミー大佐」

「陛下……。その、もう私は軍人ではありませんので」

「おや失礼。ではこう言い改めるべきかな、アスプルンド夫人」

悪戯気にルルーシュが言うとセシル・クルーミー。もといセシル・アスプルンドは赤面した。
彼女と彼女の夫であるロイド・アスプルンド侯爵との結婚式には皇帝ルルーシュ自ら足を運んだのでよく知っていた。
普通なら侯爵とはいえ一貴族の結婚式に皇帝が赴くなど有り得ないが、アスプルンド夫妻はルルーシュ皇帝と共に戦い帝国を賊軍から取り戻した戦友であり、昔からの友達の元上官でもある。その縁もあって皇帝ルルーシュ自ら足を運んだのだ。

「尤も私としては君達二人の結婚よりも、スザクとユフィの事の方が気になっているがな」

「スザク君。つい一昨日もコーネリア元帥に殺されそうになったそうですよ」

「……はぁ。姉上も相変わらずだな」

呆れるルルーシュだったが、もし今此処に『彼』がいたならば「お前が言うなよシスコン」と言ったかもしれない。

「幾らスザク君が今や帝国の英雄の一人とはいえ、皇族と外国人が結婚するなんて歴史上初めての事ですから、コーネリア元帥のお怒りも分かるんですけど……」

「俺も姉上には言っているのだが……どうも姉上はあの馬鹿をユフィの夫にしたかったらしい」

「ああ、あの方ですか。確かにあの方ならユーフェミア様の夫として身分的にも釣り合いが取れると思いますけど」

「分かっている。これはユフィの意思の問題だ。第一、あの馬鹿が生きていても、ユフィとは結婚しなかっただろう。ああ見えて、略奪愛は嫌う男だったからな」

故人を話の肴にしていると博物館の中に入る。

皇帝おひざ元の帝都にある博物館だけあって中はかなり華麗な造りだ。

ルルーシュは護衛のモニカに手で合図すると、館内には入らずその場で待機した。

「それにしても、良くもこれだけのＫＭＦを集めたものだ」

ルルーシュの前には製造元を問わずありとあらゆるＫＭＦが並んでいた。
ＫＭＦ。近代の戦争の主役であり多くの伝説的パイロットを生み出した……稀代のモンスターマシン。
初の実戦投入は第一次日本侵攻戦。そこで第四世代ＫＭＦグラスゴーによって日本の戦車などの兵器たちは成す術もなく敗れ去った。
そう。この博物館はそういう戦争の主役であるＫＭＦを展示している博物館なのだ。

「陛下。こちらが」

セシルが一騎のＫＭＦの前で足を止めると、ルルーシュもそれに倣う。そのＫＭＦは純白だった。第五世代までのＫＭＦがどこか鈍重さを感じさせるのに対して、この史上初の第七世代ＫＭＦは正に騎士という雰囲気を醸し出している。

「ランスロット、か」

「……今でこそ第七世代は旧式ですが、あの当時は最新鋭機中の最新鋭機。今の第十世代ＫＭＦの原型にもなったＫＭＦで、私達特派が開発したＫＭＦなんですよ。数年前、アイスランドで陛下の援軍として参上した際には、改良型であるランスロット・コンクエスターになってましたけど」

「知っている。俺もこいつには苦しめられた」

「えっ、苦しめられた？」

ルルーシュの顔が「しまった」というように歪む。

セシルはルルーシュが嘗てゼロであったことを知らない。必然、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの知るランスロットはコンクエスターからなのだ。

「……まぁ、それより。当時の黒の騎士団のＫＭＦも展示されていると聞いたが？」

「はい。こちらです」

セシルの案内に従うと、ずらりと黒の騎士団において活躍したＫＭＦが並べられたホールに到着した。

紅蓮弐式を初めとする紅蓮シリーズ。月下などといった騎士団製の量産型ＫＭＦ。

「これは、凄いな。量産型だけかと思えば紅蓮や斬月まで」

「元騎士団の技術顧問ラクシャータ女史が全面的に協力してくれたんで」

「そうか」

ルルーシュは過去に思いをはせる。

彼本人がゼロであった頃にラクシャータとは実際に会い話したこともあった。当時の印象としては曲者だが優秀な技術者というものであった。

ラクシャータは今でこそＫＭＦの第一人者として名をはせているが元々は医療関係の技術者であり、当時ナナリーという足の不自由な妹がいたルルーシュは、そういった方面でもラクシャータには期待していた。尤もその期待はルルーシュがブリタニアに連れ戻された事と、ナナリーがその前に死んでしまったことで無意味となった

が。
その時、ふとセシルの足が止まる。
ルルーシュが何事かと思い、セシルの凝視している方向を見て納得する。
「このＫＭＦを、よりにもよってブリタニアの博物館で展示する事はないだろう、と多数から批難もあるんですけど」
「無理もないだろう。このＫＭＦは、ブリタニアにとって不吉過ぎる」
それは最初から黒の騎士団のものだった訳ではない。当時の帝国宰相シュナイゼルが開発させた実験機であるＫＭＦが、まだゼロだった頃のルルーシュによって強奪されて、それがルルーシュに成り代わった弐代目ゼロの乗機となったという複雑な経歴を持つ。
「ガウェイン・ロイヤリティー。技術面でも性能面でも、戦時中最強のＫＭＦがこれだというのは疑いようはありません」
ＡＩ制御によるドルイドシステムと、それによる絶対守護領域。射撃攻撃の全てを無力化し、強力な電子戦能力と近接戦闘能力を持つ、史上最強のＫＭＦ。
ここに展示されてあるのは勿論外面だけの偽物だ。本物はあの時、彼と一緒に黄昏の間に封印されたままだ。
今ではロイヤリティーの名が示す通り、アヴァロンにて眠る王を守護していることだろう。
「我がブリタニアから強奪され、ビスマルクの振るうべき聖剣を奪い取り、帝国を略奪した男の操った災厄のＫＭＦ。ふっ、こんなものを自国の博物館に展示するのは、たしかに不吉だ」

「では、展示を取りやめに致しますか？」

「構わん。俺自身、不思議とこれに対して嫌悪感はない」

「御意」

「……それより、コレがあるくらいだ。勿論あれもあるのだろう？」

あれ、の意味を悟ったセシルが「こちらです」と案内する。
それは最も奥の、最も巨大なホールに一体だけあった。他のＫＭＦがズラリと並べられているのに対して、この一騎には専用のホールが与えられている。それだけでも、この博物館、ひいてはブリタニアのこのＫＭＦに対する特別さが分かるというものだ。

「すまん。クルーミー博士、少し一人にしてくれ」

「畏まりました、陛下」

共に戦った仲だけあってセシルも事情は心得ていた。
黙ってホールから出ていく。
後にはルルーシュと、ホールに一機だけポツリと聳え立っているＫＭＦだけが残された。

「……お前は、本当に死んだのか？」

帝国最強の騎士、レナード・エニアグラムの最期の搭乗機マーリン・アンブロジウス。伝説的魔術師の名前を冠したそれに、ルルーシュは問いを投げた。

「お前がいないせいで、俺はおちおち休むことも出来ない。スザクもお前がいればとっくにユフィと結婚出来ていたろう。……本当に、ズルい男だよ。一人盛大に死んで、生き残った俺達に面倒事と仕事ばかり残す。お前に軍権を全て放り投げて楽をするという俺の計画をどうしてくれるんだ？　エニアグラム家もそうだ。あれからお前と婚約の誓いを交わしたという女性が十四人、関係を持ったと告白する女が三十人、子連れが二人。どこまで面倒事ばかり押し付ける。いいか？　貴様が勝手に死んだせいで、戦後処理の殆どを俺一人がこなしたんだ！　昔、一週間の睡眠時間が一時間に満たなかったとぼやいていたな！　だが教えてやる！　俺の睡眠時間は一週間で三十分だった！　この重要な時期に俺が過労で死んだらどうしてくれる！？　それもこれも、お前が死んだせいだッ！　俺が寿命で死んでCの世界とやらに行ったその時は、お前に一か月眠れないだけの仕事を押し付けてやるから覚悟しろ！！！」

言いたい事を粗方言い終えたルルーシュは、ぜぇぜぇと肩で息をする。

他の者を下がらせておいて正解であった。もしこんな醜態をモニカやオレンジなどが聞けば、陛下が乱心なされた～、とかで大騒ぎになるだろう。

「……しかし、ああそうだ。何時までも勝手に死んだ人間などに構っていても時間の無駄、か」

当初の用事を済ませたルルーシュはゆっくりとホールから出ていく。

レナード・エニアグラム。彼は既に軍人としては総帥として、もう特進のさせようがなかった為、皇族の血縁関係のない貴族としては異例の大公爵、及び帝国宰相に任じられている。これはルルーシ

ュの故人に対する友情というよりかは、故人の死を政治的・軍事的に最大限利用したものであった。
ただし、これはルルーシュが故人に対して友情を抱いていなかったかといえばそうではない。
その証拠に、

「さようなら、レナード。お前がいなければ、たぶん俺は死んでいた」

これを最後にルルーシュ・ヴィ・ブリタニアはレナード・エニアグラムが帰還する可能性を0とした。またルルーシュが自身の在位中はナイトオブワンを任じないと宣言したのもこの辺りである。
ルルーシュは振り返り、マーリン・アンブロジウスを見つめると、今度こそ本当にその場を去った。

後世の歴史家達にとって、レナード・エニアグラムの評価は決して低くはない。
しかし決して全面的に肯定するばかりではなく、批難する者も多くいる。
神聖ブリタニア帝国滅亡から一世紀後の歴史学者ナターナエル・フリシュムートは「万軍を指揮させれば大国を打倒し、部下からの信頼厚く、決して裏切らぬ忠義の男、裁きは公明正大にして、武は古今無双」と評する一方で「数多くの女性と淫らに関係をもち、贅沢と闘争を好む」と酷評している。
またフランスの大学教授であったアデール・ドートリッシュも「上官からの命令があれば平然と無辜の民草の虐殺を行い、最上の結

果を得る為なら部下や民間人を犠牲にする事すら厭わぬ卑劣漢」と痛烈な批判をしている。

しかし当時の歴史に多大な影響を及ぼしたのは間違いなく、戦史研究者であったルイス・フェルマーはレナードを「公人の理想形、私人の反面教師」と評した。

このようにレナード・エニアグラムは私人としては数多くの短所があったが、公人としての長所がそれを凌駕しており、彼なくしてブリタニア奪還はなかったというのはほぼ全ての歴史家が意見を主にすることである。その証拠に今も尚、歴史はレナード・エニアグラムを『英雄』と刻み続けている。

SECRET1　　エピローグ（後書き）

Q：とある魔術の未元物質の連載どうすんだよ？

A：暇な時間を使って２００％趣味で書いているだけなので、『とある魔術の未元物質』が優先です。

SECRET2　　レナード　暗殺計画

――――腐敗――――憲法で保証された自由の中で、もっとも確実に起こる症状。
あらゆる社会体制において腐敗とは切っても切り離せないものである。こればっかりは絶対君主制も民主制も変わらない。ただ面白い事に民主主義が腐敗し衆愚政治に堕ちれば、次に生まれるのは強力な独裁者による独裁政権であり、更にその独裁政権は多くの場合において軍事独裁か専制国家に変容していく。社会主義にしろ民主主義にしろ、全ての体制は独裁者を生み出す卵なのかもしれない。

皇歴２０１８年４月５日。
帝都ペンドラゴンにおいて一つの小さな陰謀が産声をあげようとしていた。
それは歴史で語れることのなかった黙示録。真実という光から永久に追放された、一人の女の健気で哀れな復讐劇である。

アンヌ・ディ・ブリタニアは齢四十五になりながらも三十代の若さを保っている美しい皇妃である。流れるような茶色のロングヘアにクリッとした瞳。十人が十人、一目見れば心を奪われるであろう。だが今、その美しい顔にはただ耐えようのない悲しみと憎悪のみがあった。

息子が、死んだ。否、殺された。

アイスランド侵攻軍総司令官を務めていたジョセフ・ディ・ブリタニアの実母であるアンヌ・ディ・ブリタニア皇妃は、その諫言をジョセフの臣下であり当時のアイスランドで共に従軍していた血縁であるレイモンド・アウデンリート伯爵より聞いた。

「ジョセフ！　ああ、ジョセフ……。なんて惨い。父である陛下の御ために、勇気を胸に戦場へと赴きながらも……その命を、あの平民の子倅に奪われるなど……。そんな事が……あぁ」

「ご心中お察しします、アンヌ皇妃様。このレイモンド・アウデンリーと、ジョセフ殿下の御傍に仕えながら殿下の御身をお守り出来なんだこと万死に値しましょう」

アンヌ皇妃と同じ茶色い髪を持つレイモンド伯爵は静かに頭を垂れた。

「……いえ、聞けばそちは息子が戦死する際に偶然哨戒に出ていたとのこと。そなたに罪はない。……真の罪人たるべきは、息子の補佐を命じておきながら、卑劣にも息子を謀り、殺したルルーシュ・ヴィ・ブリタニアッ！」

思い出すだけで吐き気がする。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。少しばかり頭がキレるのを良い事に、常に息子を馬鹿にしていた痴れ者。いや黒い髪を持つ小童だけではない。その母マリアンヌもだ。大人しく騎士の地位に甘んじていればいいものの、血の紋章事件の動乱に乗っかり皇妃の地位に納まった。

アリエス宮でマリアンヌは死に、その子息達もエリア11で死んだと聞いた時は鬱憤が晴れる気分だったが、そのルルーシュはあろう事は生きて本国に帰還した。そればかりか、帝国に対してなんの

功績もないというのに、アイスランド侵攻軍の副指令に任じられ、そしてジョセフを……息子を謀殺したのだ。

母である自分の目から見て、ジョセフは皇帝の座につくのは難しい立場だった。単純な順番でいけば第一皇子オデュッセウスがいるし、才覚の面ではシュナイゼルには及ばない。武勇でも男子でありながら、戦場の戦乙女と謳われるコーネリアには勝てなかった。

それなりに能力は高いが天才ではなく秀才。それが周りの評価であり、実の母であるアンヌ皇妃自身も内心その通りだと思っていた。

しかし、そんな評価など関係がなかった。

問題とするべきはジョセフが皇帝につく確率がどうのこうのなどではなく、アンヌ・ディ・ブリタニアがジョセフ・ディ・ブリタニアの母であり、ジョセフ・ディ・ブリタニアがアンヌ・ディ・ブリタニアの息子だということだけである。

確かに才能はなかった。でも息子はそれ以上に優しかった。

誕生日には必ず盛大に祝ってくれたし、帝国と父親の為に必死になって勉学に励んでいた。才能はないが自慢の息子。腹を痛めて生んだ我が子。

それが殺されたのだ。敵ではなく味方の、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの醜い策謀により。

「いえ、アンヌ様。此度の謀略、ルルーシュ皇子一人によって為されたものとは考え辛く思います」

レイモンド伯の言葉にアンヌは首をあげる。

瞳から零れる涙が、照明に照らされキラリと反射した。

「どういうことですか？」

「アイスランド侵攻の際、ジョセフ殿下はルルーシュ皇子のことを強く警戒されておりました。名目上は副司令の地位にありましたが、一度たりとも司令部には入れなかったのです。そうジョセフ殿下が戦死なされた後を除くならば。そんなルルーシュ皇子が密かにＥＵ軍にジョセフ殿下のおられた場所と基地の詳細をリークする。これは不可能でしょう。誰か内通者がいるものと、私は愚考する次第であります」

「その内通者に目ぼしはついているのか？」

「はっ」

「誰なのだ、それは！」

「ナイトオブツー、レナード・エニアグラム卿です」

予想外の名前に、アンヌ皇妃は驚愕する。

ナイトオブツーとは皇帝守護を絶対の指名とする十二騎士の一角。それが皇族であるジョセフを害するなど、考えたくもない。

「そんなのは、本当に……」

「有り得ないとは言えないでしょう。如何に皇帝陛下の守護を絶対とするラウンズであっても人の子。現にラウンズが時として主君に牙を剥くのは『血の紋章事件』の例を鑑みても考えられることです。またレナード・エニアグラムとルルーシュ皇子は幼い頃よりの友人であり、ナイトオブツーがルルーシュ殿下と共謀し、皇位継承のライバルであったジョセフ殿下を害さんと狙うのも可笑しくはありますまい」

「そうか……エニアグラム卿が……」

皇帝を、ひいては皇族守護を使命とする筈の帝国騎士が、ジョセフを、息子を殺した。

レナード・エニアグラムとは何度か祝いの席で会った事がある。気持ちの良い騎士だと、そう思っていたのに。私利私欲のため、息子を殺したのだ。

「レイモンド……彼奴等を！　ルルーシュとレナードの二人を殺し、息子の仇をとるのに手を貸してはくれぬか？」

「勿論でございます、アンヌ皇妃様。微力ながら全力でお手伝いさせて頂きます」

「おぉ。そちは真の忠臣。ジョセフもヴァルハラでその忠義に喜んでいるだろう」

「恐縮の極みにございます」

恭しくレイモンド伯が礼をする。

一瞬レイモンド伯の瞳に宿った邪悪な光については、アンヌ皇妃は気づかなかった。

「して、どのような方法であの二人を」

「ルルーシュ皇子は現在エリア２２総督として赴任しており警備は万全。レナード・エニアグラムも同様です。ですが私めの掴んだ情報によると近々レナード・エニアグラムは皇帝陛下への報告と休暇のために一時帰国するとのこと。そこを狙い手始めにレナード・エ

ニアグラムを抹殺し、それを聞いてエリア２２から出てきたルルーシュ皇子を」

「見事な策だ、レイモンド！　よし。子細は主に任せる。頼んだぞ、息子の仇を討ってくれ！」

「御意」

アンヌ皇妃の住まいバール宮から出て、予め用意してあった車に搭乗したレイモンド伯は小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「どうでしたか、首尾は？」

同乗していた側近の部下である執事が尋ねた。

「思ったよりも乗せやすかった。アンヌ皇妃はダンスや音楽には秀でておられても、このような謀略には慣れてはおられないようだ。だから簡単に騙される」

「ルルーシュ殿下とエニアグラム卿がジョセフ殿下を謀殺したというのは虚偽と？」

「さぁな。そんなことは知らん。本当に殺したのかもしれんし違うのかもしれん。重要なのは腹立たしいエニアグラムの小童とルルーシュを殺す算段が出来たということだ」

宮廷内でもオデュッセウス派に属するレイモンドからしてみれば、降ってわいた皇位継承のナンバースリーであるルルーシュの存在は邪魔なだけだった。コーネリアこそいなくなったが、未だにシュナ

イゼルという敵がいる今、ルルーシュなんていう新たな対抗馬に出てきてもらっては困るのだ。
なによりも。

「レナード・エニアグラム。家柄と姉の力でラウンズとなった小童がッ！」

レナードがラウンズに登用されてから、レナードとその生家に対する厚遇っぷりときたら異例のことだ。レナードが後援貴族となったルルーシュに対する厚遇もそうであるし、エニアグラム家も嘗てない程の権勢を手にしている。宮廷内では皇女の誰かをレナードに嫁がせ、次代の後継者にするという真実味のある噂まで流れる始末だ。

自宅に帰ったレイモンド伯は直ぐに子飼いの部下を呼んだ。

「御呼びでしょうか、伯爵」

暫くして三十程の軍服を着た男がやって来た。
アドルフと言う名の軍に所属する少佐である。
レイモンドはレナード暗殺について説明した。

「そういう訳で貴卿には三十人ほどを率いて奴を殺して欲しいのだ」

「……申し上げます。ナイトオブツーを殺すのに三十では少なすぎます。彼を殺そうとするならば最低でも千人は必要かと」

「せ、千人！？　阿呆か貴様は！　千人などという大人数を動かせば暗殺どころか戦争ではないかっ！」

「そこで、なのですが。他に代案が」

「ほう。申してみよ」

「はっ。聞くところによるとエニアグラム卿はかなりの好色家でおられると聞きます。如何にラウンズとはいえど同衾した女性相手には警戒が薄れるでしょう。そこを狙うのです」

「フムフム……それは良い」

その後、アドルフとレイモンド伯の密談は数時間ほど続いた。密談が終わった時、レイモンド伯にはただ残虐な笑みのみがあった。

その頃、帝都ペンドラゴン内にあるレナードの屋敷にて。ナイトオブツー、レナード・エニアグラムは直属の部下である主任より報告を受けていた。

「なに？　レイモンド伯とアンヌ皇妃様が会っただと？」

「はっ。帝都ペンドラゴン内にある間者の一人がそう報告して参りました」

「ほう、それは興味深い」

間者といってもジャパニーズＮＩＮＪＡなどのような怪しげな集団ではなく、ペンドラゴンに住む住民やメイド等に金を渡し、噂話や近況などを報告させているだけだ。

中には誰が誰の家を訪れたとか、誰と誰が婚約したとか、そういう下らない話題ばかりであり、今回もその類であろうと普通の人間なら決めつける所だ。そう普通の人間ならば。

「レイモンド伯。その名は聞いた事がある。ジョセフ殿下の幕僚の一人で、奇襲作戦の際に偶然出ていたために難を逃れたというあいつだろう。確かアイスランド総督になったルルーシュに『お前なんか必要ない』みたいな事を言われて本国に逃げ帰った筈だが……」

「そのレイモンド伯です。そしてその彼が訪れた屋敷は」

「アンヌ皇妃様。今は亡きジョセフ殿下の母君であらせられる御方だ。ふふふふ、どうにも血腥い匂いがぷんぷんする」

「どちらにせよ用心するに越したことはないでしょう。レイモンド伯の知能はそれほど高水準ではありません。そのような低能な人間ほど、予想もつかぬ暴挙に走るものですから」

「相変わらず手厳しいな主任。レイモンド伯の坊ちゃんが聞けば顔を真っ赤にするだろうな。……だが覚えておこう。レイモンド伯如きがルルーシュ殿下をどうこう出来るとは思わんが、万が一ということもある。アイスランドにいる殿下に報告はしておこう」

レナードの邸宅にアングラード侯爵からのパーティーへの招待状が届いたのは丁度その頃であり、レイモンド伯がアングラード侯爵からのパーティーへの出席を病気を理由に欠席する旨を告げたのもこの頃である。

帝国最強の十二騎士が一角、レナード・エニアグラムを標的として暗殺計画は、ゆっくりとその幕を開いていった。

SECRET2　　レナード　暗殺計画（後書き）

黙示録ですから、本編後だけではなく本編では描かれなかった補足という側面もあります。本編を騎士道物語とするならば、黙示録は権力闘争や権謀術数、謀略、宮廷における暗殺や粛清などが主になっていきます。

後は……多くの民間人が犠牲になった地獄のロシア戦線なども書きたいですね。

SECRET3　権力闘争

――――権力闘争。
ブリタニア数百年の歴史の中で、この戦いは戦争よりも長く濃く多く行われてきた。血で血を洗う権力闘争。明日の食事に毒が入っているかもしれない恐怖。常に狙撃手に頭を狙われているという緊張。もしかしたら実際の戦場よりも恐ろしいかもしれない。日常が一転、地獄になるのだから。

アングラード侯爵の主催によって開かれたパーティーは侯爵が有数の資産家であることも手伝って、相応に素晴らしいものだった。
何が一番素晴らしいかと言えば首をかしげたくなるが、レナードに問えばこう返ってくるだろう。
即ち「美女」と。

「……流石は財界の雄と名高きアングラード侯爵主催のパーティー。参加する女性も質が高い」

年代物のワインを愉しみながら、さらりと参加している貴婦人達を見る。ただし決して下心を前面に押し出さない。あくまでも高貴に、そして優雅に。
一般庶民は兎も角、貴族の女性とは貴公子に憧れを持つものだ。

そして都合の良い事にレナード・エニアグラムは貴公子に成りきる容姿と演技力を備えていた。

「しかしエニアグラム卿。私も一緒に参加して宜しかったのでしょうか？」

随員として共に来たキューエルが言う。

服装は何時もの軍服ではなく、会場に相応しいタキシードだ。

「ナイトオブツーの直属部下にして帝国子爵。侯爵の主催するパーティーに参加する資格は十分だろう」

「それなら主任は」

「主任はマーリンの調整という仕事がある。正式にアイスランドに派遣された今、本国に帰国できる機会はそう多くはないからな。主任にはこの機会を十分にいかして貰っている」

一応アイスランドにもナイトオブツー専属開発チーム『カムラン』の為の開発施設はあるが、やはり万全を期すには本国にある施設が一番だ。

「なにより折角のパーティーに主任なんかを侍らせていたら、他の貴婦人方の興味が薄れてしまうだろう？」

「……それが、本音ですか」

「建前だ……それに、女性ばかりじゃない。アングラード侯は美食家としても知られている。その証拠に、出されている料理も素晴らしい」

レナードとキューエルが何だかんだでパーティーを愉しんでいると、ドレスで着飾った女性が一人、レナードに近付いてきた。エキゾチックな黒髪に、サファイアのような瞳をした女性だ。

「もし。ナイトオブツー、エニアグラム卿ですか？」

「そうだが、そういう貴女は」

「これは失礼いたしました」

赤いドレスの女性はスカートの裾を持ち上げ一礼する。

何処となくぎこちない仕草であった。

「私はレギーナ・アバルキン、アングラード侯の遠縁の者です」

「それはそれは。侯爵に貴女のような美しい親類がいたとは知らなかった」

「ご冗談を」

「嘘なものか。私は戦場では嘘をつくが、女性を褒めるときに嘘を言った事はない。相手がご高齢のご婦人だろうと必ずや美点を見つけ出しますよ」

「まぁ、お上手ですこと」

レナードとレギーナと名乗った女性は暫しの間談笑すると、キューエルに後を任せて奥の部屋へと言ってしまった。

上官が何のために奥の間へ行ったのかを熟知していたキューエル

は、ワインを一口飲むと溜息をついた。ただし彼の飲んだワインの中に、何時の間にやらか入っていたメモを見るまでは、だが。

レナード・エニアグラムは情事が終わると一人寝入っていた。
全くこれでは拍子抜けだ、と思う。
アドルフ少佐の依頼を受けた時は、本当に一生に一度の大博打というような気分だったが、こうもあっさり予定通りに事が運ぶと呆気なくて逆に呆然とする。

なにはともあれ、今や帝国最強の十二騎士の一角は、貴族でも何でもない女の手の内にある。レギーナと名乗った女がただ懐に仕舞った毒薬を口に含ませるだけで、レナード・エニアグラムという男を絶命させる事が出来るのだ。

そう思うと今度は不思議な昂揚感が女を満たした。
貧乏な家に生まれ容姿だけを頼りに生きてきて、最終的には変な男に引っ掛かって莫大な借金のみが残されたような負け犬だ。ガリアード中佐からの依頼を受けたのも、レナードを殺せば借金は全て返済してくれる上に報酬まで出すと言われたからだ。
絵に描いたような負け犬。それが自分。
そんな己が帝国でも屈指の勝ち組であるレナード・エニアグラムを殺す。英雄を殺すのは紛れもない自分なのだ。

震える手で毒の入った小瓶の蓋をあけると、それをレナードの口元に運ぶ。
もう少しだ。もう少しで英雄を、殺せる。歴史が変わる。

「動くなッ！」

しかし歴史の変容は突然扉を蹴破って入ってきた男によって防がれた。
まるで待っていたかのように部屋に飛び込んできたレナードの部下、キューエルは真っ直ぐ銃口を女に向ける。

「えっ、なんで！」

なんでこのタイミングでキューエルが来る！？
まるで全てを予想していたかのような。

（まさか……）

恐る恐る、隣で眠っている筈の男を見た。
そして絶望する。レナード・エニアグラムはパッチリ目を開けていた。

「謀を巡らせるには考えが甘かったな。しかし今日の敢闘賞はキューエル。情事の最中も部屋の前で待ち惚けしていた君に乾杯（プロジット）」

「それを言わないで下さい、なんだか負けたような気がするので」

「しかし詰めが甘い。第一そのドレスにしろ敬語にしろ慣れてないのが丸分かりだった。演技も下手、作法もなってない。貴族として溶け込むには品性がやや欠けていた」

「わ、私は……」

「尤も貴族でも成り上がり者なら、それも納得出来たがアングラード侯爵家は古くからある名家。遠縁とはいえ親類が礼儀作法がなってないなんて事がある筈もない」

キューエルが女の両肩を掴む。
振り払おうとするが、軍人の手を女の力でどうこう出来る筈がない。

「さて。このような大それたギャンブルをしたんだ。負ければどうなるか、想像はしてあると思うのだが……どうかな？」

パーティーを体調不良を理由に途中で辞したレナードは、再び自らの邸宅へと戻っていた。
自分で淹れた珈琲の味を愉しみつつ、読書に興じていると仕事を終えたキューエルが帰還した。

「吐きましたよ」

「どうだった？」

「女の本名はカルラ・デーデキント。ルイジアナに住む娼婦です。犯行に及んだ動機は、エニアグラム卿を暗殺すれば借金を帳消してくれると依頼主に言われたからだと」

「依頼主の名前は？」

「ガリアード中佐。帝国軍人であり今は亡きジョセフ殿下の母君であらせられるアンヌ皇妃様の腹心でもある男です」

「……馬鹿な女だ。首尾よく俺を殺せたとしても、口封じに殺されるのがオチだろうに」

「女の処遇は如何致しますか？」

「一介の娼婦が私欲でラウンズを殺そうと謀ったのだ。法に照らし合わせれば死刑しかないだろう。……だが美しい女であったが故……苦しまないよう毒でも与えてやれ」

「イエス、マイ・ロード」

（それより問題はアンヌ皇妃様だ。アンヌ皇妃様は箱庭育ちのご令嬢。一人でこのような姦計を思いつくとは考えずらい。今日のパーティーへの欠席といい、先日にアンヌ皇妃様と密会していた事といい、やはりレイモンド伯が裏で糸を引いているのだろう。だが証拠がない。この推測が間違いである可能性もある。エニアグラム家とラウンズとしての権限を行使すれば、レイモンド伯如き問答無用で殺し隠蔽するなど造作もないが、余りそのような乱暴な手段はとりたくはない。ならば……）

ハワード大尉は侍従に話を通すと、直ぐにバール宮の中へと通された。

執事の案内で一層大きな扉を開けるとアンヌ皇妃がいた。皇妃は執事や侍従たちに下がるよう命じると、後にはハワード大尉と皇妃だけが残される。

「レイモンド伯の遣いというたな？」

「はっ。主よりアンヌ皇妃様に成功の報告に参りました」

ハワード大尉の報告を聞くとアンヌ皇妃の顔がパっと輝く。

「そうか！　これで息子の仇はあの平民の息子であるルルーシュのみ！　レイモンドはよくやってくれている。ジョセフもヴァルハラで喜んでいるだろう」

「……ところで、心苦しいのですがアンヌ様にはお願いがあるのです」

「なにか？」

「成功させるに辺り我が部下にも犠牲が出ました。彼等に対してもアンヌ皇妃様からのお褒めの言葉を頂きたいのです」

「そんなのはお安い御用だ。ジョセフの仇討のためナイトオブツーを打倒したその功績、私は決して忘れる事はない」

「ありがたき幸せにございます、皇妃様。彼等もヴァルハラで喜んでいられる事でしょう。では、私もこれにして失礼させて頂きます。次の準備もありますので」

「うむ。頼むぞハワード大尉。レイモンド伯にも伝えておくれ。私にはお主だけが頼りなのだと」

「畏まりました」

ハワード大尉は恭しくお辞儀をするとバール宮を辞する。
外に止めてあった車に乗り発進させると漸く一息つき、主君のもとへと帰った。

車を走らせ暫くするとハワード大尉は主の待つ邸宅に到着した。

そしてアンヌ皇妃のもとへ行くように命じた主に対面する。

「やはりレイモンド伯が裏で人を引いていたか」

「はい、間違いありません。自分がレイモンド伯の遣いと称して尋ねたところ、アンヌ皇妃様は『これで息子の仇はルルーシュ殿下のみ』なる言葉を発し、またエニアグラム卿を害そうとしたのも間違いはないようです」

「うん、分かった」

ハワードの主、レナード・エニアグラムは背後に控えていた主任から小切手を受け取ると、そこに何かを書き込みハワードに渡した。

「これは気持ちだ、取っておけ」

「はっ」

「では下がれ」

「イエス、マイ・ロード！」

ハワード大尉が出て行ったのを確認すると、主任と一緒に背後に控えていたキューエルが、

「これからどうするので？　皇妃様を唆して卿とルルーシュ殿下を害そうとしたレイモンド伯は許してはおけませんが、皇帝陛下に御報告を」

「主任。俺のマーリン、それにキューエルのヴィンセントとサザー

ランドを五機ほど手配しろ」

「畏まりました」

主任が準備をするために出ていく。

だが納得できないのはキューエルだ。

「エニアグラム卿。皇帝陛下に御報告しなくてよろしいのですか！？」

「報告すればレイモンド伯にもその話は伝わるだろう。それから討伐軍を差し向ければ、自暴自棄になったレイモンド伯が何をしでかすか知れたものじゃない。最悪、国内の共和主義者と手を組んで暴動を起こすかもしれん」

「ですがアンヌ皇妃様の証言だけで証拠になるのでしょうか？」

「証拠？　そんなもの無ければ作ればいい。罪状は……そうだな。アンヌ皇妃様を口先三寸で騙し、帝国に対し謀反を企んでいた、これでいいだろう。謀反人相手なら、ラウンズが陛下の判断を待たずに動いたとしても許容範囲内だ。その権限がナイトオブツーの看板にはある。レイモンド伯させ抑えてしまえば、アンヌ皇妃様御一人では何もできまい」

「し、しかし……」

「良い事を教えてやる、キューエル。ラウンズの戦場に敗北はない。……そして俺の場合、その戦場は権力闘争にも適合される。俺が今まで何度暗殺者に襲われたと思ってる？　ルルーシュ殿下の後援貴族になった時点で、俺もブリタニア暗殺と粛清の歴史に身を沈

めてる。今更後戻りは出来ない。これはそういうものだ」

それは正に電光石火の作戦であった。
本国に持ち帰っていたマーリンとヴィンセント、そして主任が手配した五機のサザーランドはレイモンド伯邸を急襲。
突然の事態に次の暗殺計画を練っていたレイモンド伯は対応できず、抵抗らしい抵抗も出来ないまま捕縛されてしまう。
その後、捕縛したレイモンド伯から実にブリタニアらしい方法で情報を引き出すと、次の日レナードは宮廷に参内し、ブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアにレイモンド伯とアンヌ皇妃が共謀して実行した『レナード及びルルーシュ暗殺計画』について話す。俗にいう所の『ジョンソン事件』である。ただし一般に公開された情報は『レイモンド伯の謀反未遂』のみでありアンヌ皇妃がこれに共謀していたことは意図的に伏せられた。
一般民衆がこの事実を知るには、ブリタニア帝国の滅亡を待たなければならない。
この事件に対し皇帝シャルルはレイモンド伯の死罪及び爵位の剥奪、そしてアンヌ皇妃には自殺が命じられた。これの執行人は皇帝直属の騎士たるナイトオブツー、レナード・エニアグラム卿。

「何故！　何故陛下が私を！　陛下に取り次いでくれ。離せばきっと陛下はお分かりになって下さる。これはルルーシュの企み。私は親として、ジョセフの仇を！」

「アンヌ皇妃様。私は陛下より皇妃様に自害と給われと命じられております、がその具体的な方法については指示されておりません。短剣か銃か毒か、お好きな方法をお選び下さい」

「くっ……！　ナイトオブツー！　お主は皇族守護を任とするラウンズでありながら、この私を殺すというのか！？　我が息子だけでは飽き足らず、なんたる不忠か！」

「私は皇帝陛下の守護を絶対の任とするのであって、陛下の命あれば皇族の方であろうと手にかけさせて頂きます」

「なら息子はッ！　ジョセフの死も陛下がお命じになったというのか！」

「ジョセフ殿下は戦死なされたのです」

「違う！　ジョセフはルルーシュの姦計によって殺された！　でなければ息子が安々と死ぬはずがない！」

「そのような証拠は何処にもございません。仮にルルーシュ殿下がそのような策を弄されていたとしても、皇帝陛下ならば黙認なさるでしょう。我がブリタニアの国是をお忘れですか、皇妃様」

「嫌だ！　私は……死ぬのは構わない。ジョセフの下へ行けるのなら。だが……このような屈辱を」

「ご安心ください皇妃様。貴女の死は公式には病死として発表されます。貴女と貴女の生家に傷はつきません」

「……誰か！　私の味方はいないのか！？」

バール宮にアンヌ皇妃の叫びが響く。

その声に応じるものは誰もいない。執事をはじめとした侍従達は下がらせてあるし、いるのはレナードとアンヌ皇妃、そしてレナー

ドの部下しかいない。
キューエルが少しだけ反応したが、それだけだ。
「残念ながら皇妃様。貴女にある自由は自殺の方法のみです」
「……そうか」
アンヌ皇妃が短剣を持つ。
諦めたようにそれを自らの首に向け、一転、レナードへナイフを突き刺した。
パリンッと金属が弾けるような音が響く。
アンヌ皇妃のナイフはレナードを傷つけることはなかった。刃が肉に届く直前、レナードの手刀が刃を粉々に砕いてしまったのだ。
「では、お覚悟を」
冷酷にレナードは告げる。
「……唯ではすまんぞ！　いずれ、お前も報いを受ける時がくる！」
「ではその時まで私は生きましょう」
怨念すら篭った瞳でレナードを凝視すると、アンヌ皇妃は毒の入った杯を持つ。
「ああ……ジョセフ。……お前の仇すら討てなかった、愚かな母を……どうか許しておくれ」
そうしてアンヌ皇妃は毒杯を飲み、死んだ。
動かなくなった遺体にレナードは十字をきると、丁重に遺体を運

ばせる。

「……アリエス宮での暗殺を契機に権力者を目指したが、権力者になって自分が似たような事をするとは、本当に世の中は皮肉に満ち溢れている」

その呟きを、主任だけが聞いた。

レナードは一瞬だけ複雑そうな表情をしたが、直ぐにいつもの平静さに戻ると部下に指示をだし、その場を去っていった。

皇歴２０１８年４月７日。公式には病死として、アンヌ・ディ・ブリタニアの死が公表される。

そして奇しくも同年１０月１３日、皇帝シャルルは人知れず死亡し、皇歴２０１９年７月７日にはナナリー・ヴィ・ブリタニアが死亡し、次の年にはレナード・エニアグラムが死亡した。ただしアンヌ・ディ・ブリタニアが最も憎んだルルーシュ・ヴィ・ブリタニアはその後数十年を長生きする。結局、悪人だろうと善人だろうと恨まれていようと憎まれていようと、長生きするのも早死にするのもランダムということなのだろう。

SECRET3　　権力闘争（後書き）

Q：連続更新なんかして本当に『未元物質』大丈夫なのかよ？

A：数か月間暇つぶしに描いていた書き溜めを放出してるだけです。

SECRET4　ロシア　戦線

――――失敗が人間を成長させる。
この世に失敗のない人間などはいない。誰しも失敗するし、それを一々責めても仕方ない。人間は失敗を経験することで、次の成功へとつなげる事が出来る。失敗が成長を生み出すのだ。ただし失敗をしながらも成長しないのは愚かな事だ。

皇歴２０１７年３月２０日。
ロシア戦線は膠着状態にあった。
当時ロシアの西側はブリタニアの植民地支配下にあったが、ＥＵの勢力が強かった東側は今だロシアの支配下にあったのだ。
東ロシアの防衛、及び西ロシアの解放を大義名分とするＥＵの総司令官はゲルハルト・ダンジェルマイア大将は二等兵からの叩き上げで、齢６３になる老練の将軍である。
対するブリタニア軍の総司令官は第五皇子バジル・ロム・ブリタニア。勇猛果敢と称される一方で、猪突猛進と陰口を叩かれることもある男だ。
純粋な兵力ならばブリタニアが二倍。ただし総大将の才覚、そして解放軍であるＥＵと侵略軍であるブリタニアとでは民衆の支持が天と地の差がある。東側のブリタニア植民地では現在もレジスタンスによる武力放棄が続いており、それの対処にも兵を割かなくてはならなかった。故に実質的な兵力差はブリタニアを３とした時にＥ

Ｕは２。
　この膠着状態を打開するために、総司令バジルの要請もありブリタニア側は切り札の投入を決定する。
　切り札とはこの場合、皇帝直属の十二騎士、ナイトオブラウンズの投入である。
　選ばれたラウンズは先日新たに加わったばかりのナイトオブツー、レナード・エニアグラム卿。
　新入りとはいえＥＵ軍の名将テオ・シードのいる基地をたった一人で堕とした偉業は有名であり、この朗報にブリタニア軍の士気は著しく上昇することになる。
　だがそれも束の間のこと。
　ラウンズの投入を読んでいたＥＵ軍総司令官ゲルハルトは、ナイトオブツーの搭乗していた輸送機を急襲。ナイトオブツーのＫＭＦと開発チーム自体は別の輸送機に乗っていたので九死に一生を得たが、肝心のナイトオブツーは撃墜されてしまう。
　予期せぬナイトオブツーの戦死の報を受けたブリタニアは、その士気を大いに低下させてしまった。なにしろラウンズの不敗神話は兵士たちの間ではもはや信仰にまで昇華されているといっていい。ラウンズが戦場にいる限り敗北はありえないことであり、苦戦を強いられても後にラウンズが控えていると思えば戦えるのだ。
　そのラウンズが死んだ。戦死した。それはブリタニア軍崩壊の序曲といって良かった。
　先ず最初にブリタニア総司令バジルが戦死する。低下した士気を持ち直すため、自ら前線にたち全軍を鼓舞しようと思ったのだったが、敵の伏兵の前にあえなくやられてしまう。
　これが痛烈な逆襲撃の幕開けだった。総司令官を失ったブリタニア軍は混乱が極みに達し、士気旺盛のＥＵ軍の前に分断され各個撃破を余儀なくされる。
　またこの時ブリタニア軍はアビエル・アダン中将、フィリップス少将などといった将軍を失い、臨時にアドニス・アーラト准将が総

指揮を担うことになってしまった。
アーラト准将は決して悪い将軍ではなかったが、いかせん全軍の指揮などはしたことがなかった。結果、敗北に敗北を重ね、ついには植民地エリアである東ロシアまでの後退を余義なくされた。
だが今はまだ誰も知らない。
ＥＵ軍は頑張りすぎた。それ故、惨劇を招いてしまう。
ブリタニアの魔人による、凄惨かつ悲惨な殺戮ショー。地獄のロシア戦線が始まった。

どうしてこうなってしまったんだ。
アドニス・アーラト准将は自分の身に起きた不幸を呪った。
ＥＵの大攻勢によりバジル殿下を始めとした上官が全滅してしまい、自分が総司令なんて座に押し上げられてしまった。
今アドニスには二つの選択肢がある。一つはどうにかして現状からの巻き返しを図るというもの。ただこちらは妥当とはいえないだろう。勝っていた兵力差も今となっては多く見積もっても互角、少なければあちらの方が多少上回っているし、士気の低下も著しく、植民地である東ロシアでは現在も断片的に武力蜂起が続いている。追い打ちをかけるように相手は老練の将軍ゲルハルト。こちらは総司令官なってしたことのない自分。勝ち目なんて万に一つもない。
もう一つの方法は、本国に状況を説明し援軍を請う事だ。如何に局地戦で苦戦しようとブリタニアは世界一の超大国。まともに戦って勝利し得る国家などこの世界には存在しない。本国に援軍を要請すれば、間違いなく援軍は来るだろう。コーネリア殿下は他の場所を攻めているので除外するとしても、シュナイゼル殿下辺りが援軍に来れば百人力だ。この情勢も打開できるに違いない。だがそれをやるとなると問題はアドニス本人だ。
上官たちが敵の攻撃で全滅してしまった今、バジル殿下やこれまでの敗退の責任は全て臨時総司令官である自分がとることになるだ

ろう。
冗談じゃない。食うのにすら事欠く極貧家庭に生まれ、明日のパンのために軍隊に入って准将という地位まで伸し上がってきたのだ。なんでそんな自分がバジル殿下や他の上官たちの分の責任をとらなければならないのか。
責任をとれば間違いなく自分は降格のうえ最前線送り……最悪の場合、バジル殿下をみすみす死なせた罪に問われ死罪と言うのもあり得る。
かといって援軍を要請せず戦ったとしても負けるのは目に見えている。
玉砕か責任問題か、究極の二択をアドニスは突きつけられていた。
そんな時、予期せぬ吉報が届く。

「アーラト准将！」

慌てた様子で下士官が入ってくる。

「なんだこの非常時に！？　遂に敵さんの大攻勢が始まったのか！」

「いえ違います！　ナイトオブツー、エニアグラム卿が生還なさいました！」

「な、なにィ！」

それはアドニス・アーラトにとって二重の意味でも吉報だった。
階級こそ同じ准将だが、ラウンズであるレナード・エニアグラムはアーラトよりも格上だ。総司令の座を押し付けるだけでなく、責任の全てを押し付けることも出来るかもしれない。それにラウンズが生きていたとなれば士気も上がるし、この状況を打開できるかもしれないのだ。

暫くして、ナイトオブツーが入室した。
しかし、なんとまぁ酷い有様であった。髭や髪はぼうぼうに伸び、服もボロボロ。余程、悲惨な目にあってきたのだろう。
「レナード・エニアグラム。少し遅れたが着任した。……さて、臨時総司令殿。早々にシャワーを借りたいのだが」
アドニス・アーラトに断る理由はなかった。
長いサバイバル生活を続けていたレナードは、はっきり言って臭かったのである。

髭も剃り、髪を切り、シャワーを浴びたレナードは元の端正な青年に戻っていた。
それから、やっと話し合いが始まる。
手始めにアドニス・アーラトは指揮権を譲りたいという旨を話した。最初、こんな責任転嫁丸出しな話なんて断ると予想していたが、レナードはあっさりとこれを了承した。
「任された。なによりバジル殿下が戦死なされたのは私に責任がある。喜んで引き受けさせて貰おう」
「そうですか。ではエニアグラム卿、本国に援軍を要請致しますか？」
責任者が移った途端に援軍を要請しようと提案するアドニス。
保身丸出しであるが、誰だって責任をとるなんて嫌なのだ。
「いや。これより我が軍はこの基地を放棄。ヤクーツク租界まで退避する」

「！」

アドニスは驚愕する。

ヤクーツク租界といえあ東ロシア……エリア１３の首都機能がある場所だ。確かにヤクーツクにはそれなりの守備兵もあるが、そこまで退避するという事は、ヤクーツクに至るまでの領土の全てを放棄し、最終決戦を挑むという事でもある。正真正銘の最終防衛線。ヤクーツクが落とされるという事は、即ちブリタニア軍にとっての敗北であり、エリア１３の陥落を示している。

「正気ですか……！　確かに我が軍は敗退続き、ですがナイトオブツーが帰還した今、援軍さえあれあ巻き返しすら可能です！」

「勿論ただ退く訳じゃない」

レナードは立ち上がると巨大パネルを指さす。

「ヤクーツクに至るまで、東ロシアには十二のゲットーがある。我が軍はこの十二のゲットーから全ての食糧を徴収する。また農業用地にも手を加える。少なくとも今年は不作になるように」

「そんな事をすればエリア１３内部の武装蜂起が益々激しくなります！　なにより我が軍はそれほど物資に困っている訳ではありません。食料を徴用してもただナンバーズが飢える……だけ……いや、まさか貴方は……！？」

「ボナパルトが地獄を見たロシア。さて、今回は彼等にそれを味わってもらおう。ああ、少し語弊があったか。味わうではなく飢える、だな」

アドニスに代わって総司令となったレナードの命令により、ブリタニア軍はヤクーツクに至るまでにある十二のゲットーから食料の悉くを徴用した。勿論抵抗もあったがレジスタンス如きがブリタニアの精鋭に敵う筈がない。ただしナイトオブツーの命令で抵抗した者も出来る限り殺される事はなかった。ただしそれは温情でも同情でもなく、民衆が生き残らなければ作戦の意味がないからなのだが。

ブリタニア軍撤退の報を受けたＥＵ軍は半信半疑ながらも侵攻を開始。ヤクーツクに至るまでの四つのゲットー全てをブリタニア軍から奪取することに成功する。それと同時にＥＵ軍の崩壊が決まった瞬間であった。

老練の名将ゲルハルトは、逸早く敵の意図に気付き西ロシアへの撤退を決定するが、他の諸将がこれに猛反発した。曰く「ここまで侵攻していながら逃げるとはどういうことか」「飢えに苦しむ民衆をおいていくのか」など、結局ゲルハルトに従い撤退出来たのはゲルハルトの祖国であるドイツの部隊だけであった。これがブリタニアのような純正部隊ならばこうはならなかっただろう。ＥＵが連合故の脆さを露呈した瞬間といえた。

しかしそのゲルハルトは撤退途中、〝何者か〟に狙撃され帰らぬ人となる。デーゲンハルト・フルトヴェングラー少将が指揮を引き継ぎ撤退を成功させるが残ったＥＵ軍の末路は悲惨なものであった。

当初こそ飢えた民衆に物資を分け与えた事で、民衆は熱狂的にＥＵ軍を支持したが、それも少しの間だけ。レナード自らが率いた部隊が補給線を分断したせいで、撤退しなかったＥＵ軍は飢えに苦しむようになる。

ＥＵ軍の兵士たちに配給される食事が日に一度になり、その一度の食事が更に少なくなるのにそう時間は掛からなかった。このままでは不味いと漸く指揮官達も悟ったのか、飢えた兵士を連れて撤退

を開始する。しかし半数ほどが逃げた所でレナードが指揮するブリタニア軍が襲い掛かった。
最初から襲い掛かっていれば飢えに苦しんでいたとはいえ一敗地に見舞われたＥＵ軍は死兵となり牙を剥く。だが半分逃げた後に襲い掛かれば、兵士たちは死ぬよりも逃げる方に気持ちがいってしまう。
最終的にＥＵの高級軍人の全ては我先にと逃げ出し撤退に成功したが、五分の一ほどの兵士たちが完全に取り残されることになった。

「エニアグラム卿。敵は四散し、当初より五分の一まで数を減らしております。今ならば簡単に殲滅できますぞ」

雑用係として連れてきたハワード中尉が言うが、レナードはそれを却下する。

「まだだ。まだ待て。ＥＵ軍が決定的な失敗をするまで」

「決定的な失敗というと……」

「直ぐに、分かるさ」

ハワード大尉はその意味をレナードの言葉通り、直ぐに知ることになる。
取り残された五分の一の兵士たちは、やがて民衆への略奪を行い始めたのだ。勿論それを止める指揮官もいたのだが、兵士に飢えさせ自分だけは三食食べている指揮官の命令を兵士たちは聞かなかった。それどころか逆に指揮官を殺しその食料を奪ってしまう。
こうなるともう収拾がつかない。指揮官を失い暴走した兵士たちほど恐ろしいものはない。兵士たちは自分達が分け与えた食料を再び民衆から奪い取り始めたのだ。当然、民衆も黙って食料を奪われ

る訳がない。最高の装備と訓練を受けた五体満足のブリタニア軍と違い、相手は飢えに苦しみ満足な装備すらないＥＵ軍。ここに民衆と兵士たちの凄惨なる殺し合いが幕を開く。

一丸となった民衆は兵士の銃を奪い反抗し、ＥＵ軍もＫＭＦを投入して民衆を虐殺していく。

そんな状態になっても、ブリタニア軍は一切手を出さず静観していた。だが何もしなかった訳でもない。ゲットー中にブリタニア軍が設置しておいた隠しカメラがあり、その映像を予めレナードが買収していたロシアに住むフリージャーナリストの名前でロシア全土に流したのだ。

民衆と兵士たちの殺し合いを、物資を略奪し女を犯す兵士を、民衆の肉を喰らい生きる兵士たちを、その全てをロシアの民衆やＥＵ軍に見せつけた。

その段階に至り、漸くレナードが動く。

「よし。出撃しろっ！」

鶴の一声で出陣したブリタニア軍は早々に孤立したＥＵ軍を降伏に追い込んだ。というより、もうＥＵ軍に戦う力などは残っていなかった。

だが降伏したＥＵ軍の兵士たちにレナードは思わぬ事を言う。

『諸君等はこの地獄のような戦場において良く戦い、我が軍を苦しめた。その奮闘に敬意を表し、我等ブリタニアは諸君等を開放する』

そう言ったレナードは、言葉通りＥＵ軍を開放し、そればかりか彼らに食事を与え、これをＥＵ軍の基地に帰還させた。

兵士たちは半信半疑ながらも命拾いした事と無事に帰れることを喜び、基地に帰還した。だがそれこそがレナードの悪辣な作戦であった。

帰還した兵士たちは、基地のＥＵ軍から激しく叱責を受け拘禁されることになる。兵士たちはこの処遇に憤慨したが、指揮官達は民間人を虐殺するのは重罪と言い取りあおうとはしなかった。
民間人への略奪・殺害はＥＵの軍規に従えば銃殺刑である。だが余りの数の多さにＥＵ軍は兵士たちを一時拘禁することにしたのだ。これがＥＵ軍の首を更に絞める事となる。
拘禁された兵士達は予めレナードが送り込んでおいた内通者の扇動で反乱を起こす。反乱といっても不良少年が銃を持っただけのテロリストと違い、実際に訓練を受けてきた軍人達の反乱である。基地内は大混乱に陥った。
その混乱を待っていたとばかりにブリタニア軍が動き出す。

『惰弱なるＥＵ軍は混乱の極みにあるっ！　もはや奴らに我が軍に抗う術などはない。既にして我等は勝者である！　進軍し、そしてＥＵ軍を粉砕せよッ！』

全軍をもって出撃したブリタニア軍は、怒涛の如き勢いでＥＵの基地を陥落させる。この早急な陥落にはゲルハルト総司令が狙撃により殺されたのも大きな要因であろう。
この勝利を切欠としてブリタニア軍は次々にＥＵ軍を撃滅していく。ＥＵもなんとか巻き返しを図ろうとしたが、ロシア全土に流された略奪・虐殺の映像により『ロシアの解放』という大義名分は事実上破壊されており、成す術もなくラウンズ参戦によって士気旺盛となったブリタニア軍に撃滅されていった。
レナードがエリア１１派遣のため指揮をシュナイゼルと交代した時には、既に勝敗は決したといってよかった。

この時の功績を皇帝シャルルは褒め称え、レナードを少将に出世させ報奨金を下賜した。

だがレナード本人は少将への昇進を「バジル殿下を戦死させる一因となりながら、今また勝利したからといって出世などすることは出来ない」とこれを拒絶し、下賜された金は全て部下たちに分け与え、残った金を酒宴の費用にしてしまった。

多くの無辜の民衆たちが犠牲になった地獄のロシア戦線。これの真相が明らかになるのはブリタニア滅亡から更に二世紀が経過してからであり、この一件によりレナードの後世の『卑劣漢』という評価は決定したといっていいだろう。

勝利の為ならば平然と部下や民間人を切り捨てる、ブリタニア屈指の騎士レナード・エニアグラム。

そんな彼だが、彼を嫌うブリタニア軍人は驚くほどに少なく、逆に高級軍人から一兵卒に至るまで慕う者が殆どであった。それは彼が功を独占せず下賜された金は全て部下達に分け与えるという度量の深さと気前の良さ、そして何処となく親しみやすい人間味があったからといわれる。

またこの時の戦いにより、レナード・エニアグラムは騎士としてだけでなく、戦術家・戦略家としてもブリタニアに確固たる地位を築くことになった。

SECRET4　　ロシア　戦線（後書き）

これで取り敢えず書き溜め放出完了です。
なんだか淡泊な文章ですが……元々２００％趣味なやつなので目を瞑って下さい。

SECRET5　ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア の 告白

―――民主主義と独裁国の違いは、民主主義ではまず投票して、そのあとで命令をきくが、独裁国では投票する無駄が省かれているということである。
この世界には様々な政治体制がある。社会主義、独裁主義、軍国主義、専制主義、そして民主主義。稀に民主主義至上主義者が、あたかも民主主義を賛美し専制国家を侮蔑するが、専制性にしろ民主制にしろ人間の生み出した社会体制の一つであり、メリットとデメリットがあることを忘れてはならない。

皇暦２０１８年１１月１０日。
ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが率いるブリタニア正統国家の拠点であるアイスランド地下基地にて、嘗ての孤高な反逆者であり現在の孤高な革命家は、一人の男に本来なら墓場まで持っていくであろう筈であった真実の告白をしていた。
「驚かないんだな？」
全てを話した男、ルルーシュはレナードにそう問いかけた。

「心のどこかで、そういう可能性の一つは考慮していたつもりだ。皇帝陛下の話しぶり、C．C．という女。ギアス能力やゼロの変貌。それにアイスランドで指揮をしていた時の奇妙に手慣れた感じ。ああ、そういう真実なら全てに合点がいく。先代ゼロが、まさか現在の皇帝とは」

ルルーシュの予想に反してレナードに驚愕した様子はない。
ただ合点がいったというような表情だ。

「……言った通り俺はゼロだ。その上で聞くが、その真実を知って尚もお前は俺に従うのか？　ブリタニアでも名門中の名門エニアグラム家に跡取りのレナード・エニアグラムは」

「随分と意地が悪い質問だ。命令とあれば答えるが、質問者が知っている答えを今更言う意味があるとは、はたして思えない」

レナード・エニアグラムという男は、私生活のいい加減さに反比例するかのように皇帝シャルルに対する忠義が厚い。この分ではレナード自身、シャルルがルルーシュ＝ゼロだという事を知っていたという事も予想がついているだろう。レナードにとってみれば主君であるシャルルがルルーシュを黙認した時点で文句を言うつもりもなく、ただその遺命に従うのみであろう。即ち、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアを新たなる皇帝として、それに仕えよという命令に。

「騎士というのも、難儀な生き物だな。遺命を絶対として、その後継者にまで忠誠を誓わないといけないんだからな。だがレナード。本心はどうなんだ？　騎士レナードでもレナード公爵でも軍人レナードでもなく、ただの個人として、俺というゼロを主君とすることを歓迎しているのか？」

「個人的な意見か……。それは、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアという男が何をして何をやろうとするかで決まる。さてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアはもしもブリタニアという国を取り戻せば、そこでどのような事を望むのか、それを教えて貰わねば答える術がない」

「専制性を廃止し民主制を敷く。皇帝という身分も貴族階級も全て廃止する。……これでどうだ？」

「民主主義、ねぇ。個人的には共産主義や社会主義よりも、一番大嫌いな社会体制だ。残念ながら騎士として、俺はその大嫌いな社会体制の構築に全力を尽くさないといけないのだが、ああこれは困った」

「そういえば聞いてなかったな。どうして民主主義が大嫌いなんだ？」

「専制国家の貴族階級に生まれた人間に、そんな問いをするのはナンセンスの極み。誰だって贅沢が好きだ。女を抱くのが好きだ。金が好きだ。遊ぶのが好きだ。特権が好きだ。俺も同じように女も酒も権力も特権も大好きだ。そんな特権が奪われるのに大賛成する者が何処にいる？」

ルルーシュは思わず苦笑してしまう。

ブリタニアには貴族階級である事を良い事に、贅沢の限りを尽くす者が少なくないが、ここまで正直に言われてしまうと逆に清々しくある。

ただレナードの言った言葉は真実でもあった。

友情や愛の為ならば、権力や金を下らないものと思える人間は少ない。いや思っていても実際にそういう時になると金や権力に固執してしまうのが人間だ。

「俗物的な理由だが、一つの真実ではある。貴族の名のもと特権を許されていた者達が民主主義なんてものを望むわけがない、か。ではレナード、お前が民主主義を嫌う理由はそれだけなのか？」

そうではない、とレナードは言った。

「今のＥＵを見ろ。一部の馬鹿な政治屋共は民主主義至上主義を唱え、専制国家たる我が国を時代遅れみたいに馬頭する事が多々ある。そう言われる度に思うものだ。貴様らに言われる筋合いも干渉される道理もないって」

珈琲を一杯飲みほしてから、レナードが更に続けた。

「対して政治に詳しくもない国民が選んだ国家元首は、政治家として優秀な国家元首ではなく人気取りの上手い国家元首。そういう人気取りだけが取り柄の無能な国家元首がそれ故の失敗をすれば国民はこぞって国家元首を非難する。愚かな事だ。失敗をした国家元首を選んだのは国民だ。ならばその罪は国民にもある。だというのに馬鹿な民衆は馬鹿故に自らの過ちを顧みず、また莫迦な国家元首を選び失敗する。本当に度し難い。そして政治屋共は国民の為の政治ではなく、次の選挙の為の政治をする始末。これの何処か素晴らしい社会体制だ」

「そんなデメリットは私とて承知している。それにお前の好きな専制性にもデメリットはあるだろう。民主制の中では確かに優秀な人間ではなく人気取りの上手い人間がＴＯＰになり易いかもしれない。だが専制性とて人類で最も有能な人間が国家元首に選ばれる訳ではない。ただの血の繋がり、相続によって保たれる」

「その為にシャルル先帝陛下は多くの妃と多くの子をもったのだ。一人しか皇子がいなければ、幾ら能力が低かろうとその皇子を後継者とするしかない。だが皇子が１００人いれば、その中から最も有能な人間を後継者とすればいいだけだ。これは皇族方だけではなく貴族も同じ。現にルルーシュ、お前と言う優秀な後継者が新たに生まれた。他にも先帝陛下のお子にはコーネリア殿下、そして忌々しい反逆者であるシュナイゼルもまた、優秀な皇子たりえた」

「一理ある。ただ毎回、優秀な皇子が後継者となるかは分からない。寧ろ親である皇帝は優秀な人間よりも、一番お気に入りの皇子を後継者と選ぶんじゃないか。歴史上、愛する側室の子を後継者とする為に正統の後継者を廃嫡にした例など幾らでもある」

「俺とて、この世界に絶対的に正しい真理があるとは思ってないさ。相手を絶対悪と仮定するのは楽だし単純だが、そんな事をすれば人間が人間としてあるべき解決手段である話し合いを失う結果になる。俺は軍人だが、武力を崇拝している訳じゃない。元来、武力の行使は物事の最終解決手段と個人的には考えている」

「ならば認めるのか。専制性のデメリットを」

「認めるも何もない。元から承知している、そんなデメリットなど。専制性が時に暴君を生むことも知っているよ。ただ、専制性は暴君だけではなく史上稀に見る名君を生むこともあるだろう」

「民主制にもそれが言える。時として、民主制は名君を選び出すものだ」

「興味深い意見だ。しかし民主制によって生まれた名君は、その能力を自由に振るう事は出来ない。何故ならば民主制という体制は名

君の足に重りをつけるようなものだからだ。政策一つを実行するにしても面倒な手続きが必要になるし、議会で革新的な政策が却下されることもある」

「民主制の重りは名君だけを縛るものじゃない。時として生まれてしまう暴君を縛るものでもある。そして専制性にはその重りがない。ああお前の言う通り名君は重りがない分、その優れた手腕を自由に発揮できるだろう。だが悪逆非道の暴君を縛る重りもまた、専制性にはありはしないじゃあないか」

「そして民主制の結果として衆愚政治がある。そして政治の腐敗が頂点に達した時、次に生まれるのは独裁政権だ。フランス革命以後、フランスが王政と民主制を何度入れ替えたか数えた事はないのか？」

「それでも、」

「だが、」

「俺は国民一人一人が試行錯誤し、その上で選ばれた国家元首が立つ民主制を選ぶ」

「俺は臣民全てが絶対君主に従い、その上にある皇帝陛下が立つ専制国家を選ぼう」

結局、そういうことだ。

ルルーシュ自身は専制国家と民主国家の双方のメリットとデメリットを知り、その上で民主制の方が良いと思った。

レナードは民主国家と専制国家の双方のメリットとデメリットを知り、その上で専制国家を是とした。

たったそれだけの違いである。

「さて、話はこれで終わりか」

ルルーシュが頷く。

結局のところ結論は出ないが、それでも有意義な時間ではあった。

レナードが席を立ち退室しようとした直前、足を止める。

「……最後に。私を含めこのアースガルズに集った全員が望んでいるのは、神聖ブリタニア帝国を賊軍より取り戻す事でありブリタニアを民主制にする事など誰も望んではいません。もしも陛下がブリタニアを取り戻した後、新たに民主制を敷けばアースガルズに集ったほぼ九割ほどの臣下は、貴方に裏切られたと思い野に下るか反乱するでしょう」

レナードに言われ、思わずハッとなる。

嘗ての黒の騎士団のような寄せ集めとは違いアースガルズは精鋭集団だ。レナード含めたラウンズが四人。ラウンズクラスの実力者であるスザク、ギアスユーザーのヴィンセントと皇帝を護衛する為のロイヤルガードもいる。技術面においてもロイドやセシル、レナードの部下である主任もおり死角がない。

しかしこの集団が嘗ての黒の騎士団と決定的に違う所は専制国家ブリタニアを支持しているかいないかだ。黒の騎士団にはディートハルトやラクシャータ、そしてルルーシュ本人などの例外を除けば日本人によって構成されている。日本という国家は実質上は兎も角、建前としては民主国家であり日本の復活を望む団員達もまた、その思想は民主制よりといっていいだろう。だからルルーシュという皇族でありながら専制性より民主制を好む男がリーダーでも、少なくとも思想面では問題はなかった。

しかしアースガルズは違うのだ。

此処に集まった者達は殆どが貴族。それか専制性の恩恵を受けている者達である。特に民主主義などというものはブリタニア人にとって敵国ＥＵの社会体制であり、皇帝シャルル自身がその演説で民主国家ＥＵを衆愚政治と痛烈に批判している。

『血の紋章事件』。帝国の皇族や貴族が血で血を洗う権力闘争を繰り広げていた頃ならば、それに飽き飽きした一部の貴族と平民階級を味方につけて民主制に改革することも出来ただろう。だが現在のブリタニアではそうはならない。

『血の紋章事件』以前、ＥＵや中華連邦の影に怯えるような国でしかなかったブリタニアを現在の世界一の超大国にまで成長させたのは専制君主である皇帝シャルルなのだ。奴隷階級に位置するナンバーズは兎も角、平民階級から貴族階級までほぼ全てが専制性の恩恵を受けていると言って過言ではないだろう。民衆を味方につけるには体制への不満が必要不可欠だが、その民衆が専制国家に賛同している時点で民主制など望む訳がないだろう。なにしろ民主国家の象徴であるＥＵはブリタニアの大攻勢の前に成す術もなく敗北を重ねているのだから。

もしもルルーシュがブリタニアを奪還すれば、現在アースガルズに参加している者達が国の中枢を担う事になるだろう。だがその中枢にいる者達は決して民主制に移行する事に賛同しない。逆に反感をもち、レナードが言うように謀反を起こす可能性も高い。

「ま、好きにすればいいさ」

言いたい事は言ったらしいレナードが今度こそ出ていこうとする。

「安心していい。例え世界中がお前の敵になっても、俺だけは味方でいてやる。好きに王道なり覇道なり歩けばいい。――――――――――では、失礼」

去っていくレナードの背中を見つめながらルルーシュは溜息をつく。
面倒な生き方をする奴だ、と思いはする。もし自分が専制国家を破壊し民主国家を創ろうとしてもレナードはそれに従うだろう。誰よりも専制主義者でありながら民主主義国家の建築に貢献する。何故ならばそれがあいつなりの騎士道だからだ。
本当に真似できない。したくもないが、自分のような人間には出来ない生き方だ。

「ふふふ。中々どうして熱い男じゃないか、お前の悪友とやらは」

「……何処から聞いていた」

「最初から」

しれっと後ろの部屋からピザをパクつきながら現れた魔女C．C．は言った。
補給物資の中にピザはなかった筈だが一体全体どうやって入手したのだろうか？
尋ねてみようと思ったが止める。聞いても疲れるだけだし聞きたくもない。

「で、これからどうするんだ。なにやら捕らぬ国家の皮算用に精を出していたが、結局のところ皮算用で終わっては何の意味もないぞ」

「上手くやるさ。元々、殆ど寄せ集めの黒の騎士団でブリタニアを破壊しようとしていたんだ。アースガルズという数は少ないが特上の駒がある今、そう落胆することもない」

「あのレナードという男もか？　一時お前はあいつの事を裏切り者

扱いしていたような気がするのだが、もしかして私のきのせいだったか」

「過ぎた事を一々五月蠅いぞ。……レナードか。あいつと共に戦って、そしてあいつが指揮をした戦いを調べて分かった事がある。レナードの本質は戦術家ではなく戦略家だという事だ。ロシア戦線もそうだった。あの戦い、あいつは焦土作戦によって相手の士気を奪うだけではなく、ＥＵの民衆の解放者という看板を例の民間人とＥＵ軍人達が殺し合う映像により破壊した。結果、ＥＵは局地戦による敗北だけではなくイメージの低下という戦略的にも大きなダメージを受けた」

言ってみればレナードの戦術は一見戦術に見えて、殆どが戦略に通じているのだ。

もしレナードに騎士としての才覚がなければ、有数の戦略家として歴史に名を残していたかもしれない。

「……どっちにしても良い駒が手に入った。レナードの奴はブリタニア奪取後には精々軍の総帥にでも任じて死ぬまで扱き使ってやる」

レナードに軍部を全て放り投げれば自分は楽が出来る。

シュナイゼルを倒した後の事は、倒した後に考えるとしよう。

SECRET5　ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア　の　告白（後書き）

そんなこんなでコチコチの専制主義者レナードとルルーシュの言い争いの巻。騎士道物語から外れそうだったので泣く泣く執筆中小説の奥深くに眠っていたものを加筆修正しました。

SECRET6　還ってきた　魔人（前書き）

これは『反逆しない軍人』本編ではなく、もし『反逆しない軍人』が原作通りに進んだらというＩＦ展開です。注意点として、

・レナードはギアス関連を全て熟知している
・スザクは守護者として完全覚醒
・ゼロレクイエム後
・アーサー王は登場せず
・原作通りルルーシュ死亡

などなどです。
ストーリーはほぼ原作準拠で進んだと考えて下さい。
他にも色々と問題はありますが「こまけぇことはいいんだよ」と言える方のみこれから先をご覧ください。

SECRET6　還ってきた　魔人

――革命は回避されるべきではない。
革命は常に成功してきた訳ではない。寧ろ失敗も数多い。民主国家を建国しながら直ぐにまた元の専制国家に戻ったり、立憲君主制にしながら議会が解散させられて絶対君主制に移行してしまう事も多々ある。革命とは劇薬であり、劇薬を使った後は穏やかな休息が必要だ。そうでなければ、体が壊れてしまう。

皇歴２０２２年。世界を絶望の淵に落とした悪逆皇帝ルルーシュの死より三年。
嘗てルルーシュ・ヴィ・ブリタニアと枢木スザクの計画した作戦。ゼロレクイエム。
世界中の憎しみをルルーシュ一人に集中させる事により、憎しみの連鎖を断ち切るという言ってみれば単純な、実行するには入念な準備と覚悟が必要なラストミッション。
ルルーシュの吐いた優しい嘘は、世界の人々を騙し、そして国々を交渉というテーブルにつかせることに成功していた。
日本は総理大臣が変わってから復興していったし、ＥＵもどうにか経済を立て直しているし、中華連邦は病状になった星刻が復帰した事で活気を取り戻している。
世界は間違いなく、平穏を取り戻しつつあった。

唯一つの国を除けば。

枢木スザク。いや今はその名前で呼ぶのは正しくはない。
悪逆皇帝ルルーシュを討ち世界を救った救世主ゼロ。現在はブリタニアに招かれた客人という扱いで、ブリタニア暫定代表ナナリー・ヴィ・ブリタニアに協力している彼は、最新鋭の第十世代ＫＭＦ『ヴィンセント・マロリー』のコックピットで極度の緊張状態にあった。

動力であるエナジーウィングを使い空中を飛行しながら、部下として与えられた三十の『ヴィンセント・マロリー』にも指示を出していく。
仮面の下で、ゼロは思わず汗をにじませる。
恐らくは世界最強を名乗っても不遜にならない力量を持ちながら、彼の素顔に余裕の二文字は全くといっていい程ない。
それだけ、ここにいるであろう敵の存在は恐ろしく、そして強大なのだ。
思わず仮面をとる。仮面をつけたままでも戦闘に支障はないと思うが、万が一という事もある。それに仮面をつけたままだと汗が篭ってやり辛い。

素顔を曝け出したゼロは再び集中力を極限まで上げる。
この辺りにいるのは間違いない筈なのだ。どうもジャミングが使われているらしくレーダーが全く当てにならない。

『ゼロ！　発見しました。間違いな――――――――――――』

「ロナルド！」

それが言い終わる事はなかった。
目標を最初に発見したパイロットの騎乗するヴィンセントは、次の瞬間にはヴァリスの弾丸に撃ち抜かれていたのだ。
「くそっ！　全機、一度距離をとって散会しろ！　密集していればやられる！」
流石は訓練を受けたパイロット達。
上官の命令を聞くや否や瞬時にそれを実行していく。
報告によれば相手の数は一騎。囲んで戦えば、勝てる。そうゼロが思ったのは当然だが、この場合は不正解であった。
「！」
上空からエナジーウィングから発射されたであろう赤いレーザーが、まるで雨のごとく降り注ぐ。それをヴィンセント達が防ごうとブレイズルミナスを展開した時、上空から隕石のように黒い影が落下してきた。
ゼロはその後の行動を予測し回避行動に移ったが、他のＫＭＦ達は間に合わない。
落下してきた黒い影から飛んだ小さな物体からハドロン砲のようなレーザーが発射され、ヴィンセントを撃ち抜いていく。
僅か二十秒足らずで『ヴィンセント・マロリー』を与えられた三十の精鋭は全滅した。
残っているのは指揮官たるゼロと、全滅させた敵だけ。
「……マーリン」
敵の機体の名を呟く。
夜よりも暗い黒と、血よりも淡い真紅で彩られた魔術師を睨む。

『ゼロ――――――いや、枢木スザク。お久しぶり、と言うべきかな』

「知っていたのか？」

『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアと知り合ったのは、貴様より俺の方が早い。アレがどういう選択をしてどのような行動をしたかくらいは予測がつく。その愚かさも！』

マーリンがＭＶＳを抜き、切りかかってくる。
それを自分専用にカスタマイズされたヴィンセント・マロリーでどうにか躱した。

「どうして君は今になって現れた！　もうブリタニアは変わっている。世界は新しい道を歩み始めている！　それを、どうして！」

『革命者らしい言い草だな、枢木スザク』

「その名は、既に捨てた！　今の俺は……ゼロだッ！」

『薄汚れた名を捨て虚無（ゼロ）となるか……それも良かろう。しかし今の世界は、この私には認められん！』

「そんな自分勝手な感情で、やっと平和になった世界に戦争を起こすのかい、君は」

『革命家は新時代を賛美し、それに着いてこれない者や逆行しようとする人間を悪と決めつける。貴様も同様だ。――――――世の中には、新しい時代に適合しきれない愚者もいるということを、忘

れたかッ！』

「どう取り繕うと、今の君は現在のブリタニアの法律を犯している。ならば――――――俺の。いやゼロの敵だ！」

『ははははははっ。生憎だな、裏切りの枢木卿。私にとってのブリタニアは今も神聖ブリタニア帝国に他ならんのだよ。新体制の法など従う義理も所以もない』

「ソレは詭弁だ！」

『詭弁とて、高らかに吼え続ければ真実にもなる』

「うっ……！」

ヴァリスが掠め、ヴィンセント・マロリーの装甲に皹が入る。技量自体にそれほど差はないが、だからこそ機体性能の差が大きくなっている。

このままでは、

『俺と互角に戦うとは……「守護者」としては完全に覚醒しているようだな。しかし、残念だ。そんな陳腐なＫＭＦに乗っていたのが貴様の敗因となる。――――――――――ゆけ、ビット！』

十二のビットが同時にマーリンから飛び立つ。

其々のビットは一つ一つが異なる軌道を描きながら、ヴィンセントの息の根を止める為に迫ってくる。躱そうとするが、機体の反応が技量に追いついてこない。

結果、十二のうち七のビットの攻撃が直撃した。

『この世で現存する第十一世代ＫＭＦ、マーリン・アンブロジウス・ラグナロク。その主武装、ワイアードギアスによる全自動制御による高速移動砲台ビット！　パーフェクトだ、主任』

（不味い……！）

幾らスザクの技量が優れていても、相手の技量がそれと同等かそれ以上ならば、技量で性能差を引っ繰り返す事は出来ない。

このままだと、負ける。

『チッ！』

しかしマーリンがスザクの騎乗するヴィンセントを貫く前に、マーリンは後退した。

その理由は、マーリンを襲った数多の火線。

数Ｋ先に悠然と飛行する浮遊航空艦の艦隊。枢木スザクの、ブリタニア政府の援軍だ。

『やむを得んか。ここは馬に蹴られる前に退散するとしよう』

「待てっ！」

『断る！』

スザクの制止も効果はなく、マーリンは、神聖ブリタニア帝国最後の英雄は去っていく。

それを何処か寂しそうに見つめていると、艦隊から通信が入った。

示されている名はコーネリア・リ・ブリタニア。現在のブリタニア軍の元帥だ。

再び仮面をつけて、通信に応じる。

『私だ』

口調をゼロのモノへと変えて、スザクが言う。

『ターゲットは逃げたようだな』

情を隠そうとして逆に無機質となった声が、通信越しに響いた。

ゼロの仮面の中で、スザクはやりきれない気持ちになり目を細める。だが、今のスザクは救世主ゼロ。そんな感傷はもはや許されない。ゼロという記号の役割をしなければならないのだ。

『面目もない。やはり今後の対策をする為に、一度ナナリー代表のもとへ帰還することを具申とするが』

『私も同意見だ。首都にいる兄上には私が報告しておこう。ゼロ、貴卿は一度我が旗艦に戻ってくれ』

『了解した』

『ああ、それにしても――――――――――』

コーネリアの言いたい事はスザクにも分かる。

レナード・エニアグラム。第二次トウキョウ決戦でフレイヤに巻き込まれ行方不明となった筈の亡霊が、如何して今になって甦ったのか。

しかしその答えを知る者はレナード以外にはいないだろう。

重要なのはレナード・エニアグラムという存在だ。

ゼロレクイエムを完遂させる前準備として、皇帝となったルルーシュはシュナイゼルやビスマルクといった帝国貴族などを纏める旗

頭を徹底的に潰していったので、今まで旧貴族や騎士達も不満を胸に秘めながらも反乱を起こす事はなかった。
だが今、その旗頭が蘇ってしまった。
レナード・エニアグラム。未だかつて敗北を知らない常勝不敗の将軍にして騎士。
旧貴族や騎士全てを纏め上げる事を可能にしてしまうカリスマが、ナナリー・ヴィ・ブリタニアと新生ブリタニア政府に牙を剥いた。

――――――――――――――――――――逆襲が始まろうとしている。

SECRET7　傀儡の主

―――主義は事実によって装飾される。
主義主張を唱える事は幼稚園児でもできる。主義を唱え実行できる者は一握りしかいない。
行動なき思想家に価値はなく、思想のない行動家には実がない。
二つを備えて初めて、人は指導者となることができる。

現在ブリタニアは帝都ペンドラゴンから北に１００ｋｍほど離れた都市に首都機能を移している。
これは帝都ペンドラゴンがフレイヤによる爆撃で壊滅した為だ。
その街で最も立派な建物に、臨時ブリタニア代表官邸はある。

ブリタニア元帥コーネリア率いる艦隊と共に帰還したゼロことスザクは、コーネリアと共に官邸へと向かう。既に話は通っていたので警護兵に何も咎められることもなく素通り出来た。
素顔のコーネリアはまだしも仮面をつけたゼロでは顔パスという訳にはいかない。なのでコーネリアなどといった重要人物と共に来ると、面倒な手続きを踏まなくて良いので楽だ、と内心でゼロは思った。

ブリタニア暫定代表ナナリー・ヴィ・ブリタニアの居室には、既

にナナリー代表とシュナイゼル元宰相が待っていた。二人とも、ブリタニアの全ての事情を知る数少ない人物達である。

『先ずは申し訳ない、ナナリー代表。預かっていた三十人の優秀な人材をみすみす失ってしまった』

「既に聞いています、ゼロ。それで本当にレナードさんだったんですか？」

『間違いなく。声もそうですが……なにより、実際に交戦した私が保障しましょう。彼は本物のレナード・エニアグラムです』

「そうですか……。そてにしても、どうして突然」

第二次トウキョウ決戦の際、死んだと思われていたレナード・エニアグラムが再び姿を現し、『メリエル・レイ・ブリタニア』という十二歳の少女を第１００代皇帝として即位させ、新生ブリタニア政府を叛逆者として宣戦布告してきたのは数か月前のことだ。

レナード本人はナイトオブワン、帝国宰相、軍総帥を兼任し摂政となった。その下にある大臣にはマックリン男爵やレオノール伯爵などがいたが、事実上のトップ兼権力者が誰なのかは明白であった。そんな見え透いた傀儡政権でありながら多くの貴族や騎士がレナードの下に集い、支持したのはやはりレナードの名声だろう。

常勝無敗。最後の円卓の騎士。ブリタニアの魔人。これらの異名は誇り高き騎士に憧憬を描かせるのは十分であった。ラウンズという存在そのものが軍部ではもはや信仰にまで昇華されていたのも大きな要因であろう。レナードの戦績を見れば分かる事だが、彼が指揮を執って敗北した戦いはないのだ。ラウンズの不敗神話を信仰してしまうのも無理はないというものだ。

騎士ではない貴族にしても、レナードは名門中の名門エニアグラム公爵家の生まれなので血筋においても、下に着く事に抵抗はない。

悪逆皇帝ルルーシュは兎も角、ブリタニアは専制君主たるシャルル・ジ・ブリタニアの手腕で発展していった国である。騎士侯という一代限りとはいえ貴族階級の多い軍部の多くや、今まで数多くの特権をもっていた爵位ある貴族のほぼ全てが、民主制に移行しようとしている現在のブリタニアに不満をもっていた。表に出せる程豪気な者や旗頭となりうる者は皇帝ルルーシュによって粛清されていたからこそ暴発には至ることなく静まっていたものの、レナード・エニアグラムという旗頭を得た事によりそれは爆発した。

今やレナードの下には、特権階級の復活を望む者、先々帝シャルル崇拝者、民主制を嫌う者、専制主義者、純粋にレナードの輝かしい武勲を尊敬する者、ブリタニア至上主義者などなど、非常に思想も目的も理由もバラバラの者達が集まっている。

しかも最悪なことに、軍部の殆どが親レナード派だということだ。元々民主制というのはブリタニアと歴史的確執も強いＥＵの政治体制である。第九十八代皇帝シャルルが人気取りの衆愚政治と痛烈に批判した事もあり、ブリタニアのメディアは敵国ＥＵがどれだけ惰弱なのかを放送し続けた。結果、ブリタニア人の中には民主制＝惰弱という方程式が出来上がった者までいる始末なのだ。

悪逆皇帝ルルーシュという史上最悪の専制君主の例があるお蔭で、軍部の全てがレナードにつくなんて事態は起きていないが、それでもブリタニア政府の軍部には内心レナードを応援する者というのは潜在的に数多くいる。

軍隊という組織が、国家への忠誠心が強くなるのは民主国家や共

産国家でもよくあることだが、専制国家たるブリタニアはその色がより強い。

レナード率いる正当なる神聖ブリタニア帝国軍は、爆発的に勢力を拡大すると瞬く間に大陸西部を平定してしまった。

驚異的な速さという他ない。兵は神速を尊ぶというが正にそれだ。

「それでメリエル・レイ・ブリタニアという少女は一体何者なのだ？　仮にもあのレナードが第百代皇帝に擁立したのだから皇室の血を継いでいるのは間違いないと思うが」

コーネリアが言った。

それはナナリーやゼロよりも、一番このような事情に詳しいシュナイゼルへと向けられたものだった。

注意を向けられたシュナイゼルは予想通り、最初に口を開く。

「父上……第九十七代の腹違いの妹だったファンティーヌ・レイ・ブリタニアの曾孫だよ。当時の第二十一皇女だったファンティーヌはバラデュール伯爵家に嫁いで、バラデュール夫人となり、その息子の孫がメリエル・バラデュールだ。父上の時代に、両親は二人とも粛清されていてメリエル本人は孤児院暮らしだったそうだね」

「それをレナードの奴が見つけて、皇帝に祀り上げた訳か。孤児から一気に皇帝か。シンデレラもこれには霞んでしまうな」

皮肉気にコーネリアが言った。

『しかし変だな。確かにシャルル直系の皇族は貴方達を除けば全て亡くなっているが、メリエルという少女以上に皇族の血を濃く受け継いでいる者は他にもいる。わざわざ苦労してまで孤児院にいるメ

リエルを見つける事に、なにか理由があったのか？』

「外戚の介入を嫌ったのだろう。もし貴族の中から皇室の血を色濃く受け継いでいる者を選べば、レナード自身が権力を自由に振るえなくなる。それに大人の皇室の血を受け継いだ者を皇帝にすれば、皇帝が自分の意思に反した行動をとるようになるかもしれない。ようは数多いる候補の中でメリエルという少女が、最も傀儡とし易かったと言うだけの話だ」

『彼は、そこまで権力を……？』

「それはないだろうね。確かに私の見る限り、レナード・エニアグラムという男は権勢欲や出世欲と無縁の男じゃない。だがかといって私利私欲のために動く佞臣でもないよ。彼が他の介入を嫌ったのは、彼が自分の能力を一番よく理解しているからだろうね。他にも指揮系統を一本化するという目的もあったと思うけど」

「……つまり、レナードさんが自分の実力を自由に発揮するために、そのメリエルという子を？」

「間違いないと思うよ。政権奪取後は、どうするか分からないけどね」

シュナイゼルはルルーシュ亡き今、世界最高峰の頭脳の持ち主だ。その見識はギアスによって操られていても変わる事はない。シュナイゼルの意見は正しいと判断した方がいいだろう。

「ところで皆さん、私から提案があるんですが」

ナナリーが意を決したように口を開く。

「レナードさん達と会談の席を設ける事は出来ないでしょうか？」
「悪くはない選択とは思うけど……果たして、向こう側が応じるかな。彼等は私達を不当に国を奪い支配した叛乱者として扱っているし」
「しかし愚かなる私の兄ルルーシュがゼロによって討たれ、世界がゆっくり平和の道を歩み始めている今、更に出血を強いる事はないでしょう。だってそれは……」

ナナリーはその先を言おうとはしなかった。言えなかった。ルルーシュとの最後の約束を遵守しているのだ。ナナリーはこの先の生涯ルルーシュを否定し続ける。悪逆皇帝ルルーシュをより完全にする為に、ナナリーは絶対にルルーシュを許せない。そして、ルルーシュの本当の願いも。
その約束を誰よりも守ろうとしているからこそ、この先再び血が流れることをナナリーは許せないのだ。

「しかし彼が応じるかどうか。ゼロ、君から見て彼はどうだった？交渉の余地はありそうかい？」
『私見だが、無理だろう。少なくとも降伏するという事だけは絶対にない。ただ……』
「ただ？」
『何らかの譲歩を引き出すことならば、或いは』
「譲歩、ですか」

結局、その日の会議はこれでお開きとなった。
何しろまだまだ懸念事項はある。
未だブリタニア北部に一大勢力を築いている旧エニアグラム公爵領では目立った動きはないが、今後の情勢次第ではどう転ぶか分からない。なにしろエニアグラム家は軽く独立国を運営できるような財力のあるような一門だ。敵に回れば恐ろしい事になる。
仮面の下のゼロの脳裏には『ノネット・エニアグラム』という名が思い浮かんでいた。

SECRET7　傀儡の主（後書き）

そろそろレナード側も書くか、それとも……。

SECRET8　君臨者

――――親の罪は子に報いる。
現代でこそ親の罪が子供に連座するなんて事はなくなったが、昔には当たり前のように連座制というものがあった。それは親子関係だけに留まらず、例えば叛乱などの大罪を犯した者は、その罪が一族全てに及び、一族郎党赤ん坊から女まで全員死罪となるなんてザラである。現代人の感覚からしたら有り得ないと思うかもしれないが、当時の人間にとっては常識だった。常識とは時代によって移り変わるものだ。

戦場から、〝正当〟神聖ブリタニア帝国暫定首都『カルデュエル』の基地に帰還したレナードを出迎えたのは主任だった。
恐らくはこの世で現存する唯一の第十一世代ＫＭＦである『マーリン・アンブロジウス・ラグナロク』から降りると、回りの兵士達が一斉に敬礼をしてくる。レナードもそれに敬礼で返すと、主任からタオルを受け取り顔の汗を拭いた。
「お疲れ様でした、総帥。如何でしたか、枢木……ゼロは」
「守護者として完全に覚醒しているようだったよ。あれは故マリア

ンヌ様にも劣らない動きだった。いやもし機体性能が同じなら手こずったかな？」

そこで負けてたかもしれない、とは言わない辺りがレナードらしい。

タオルを主任ではなく従卒の少年に放り投げると、そのまま共に歩いていく。レナードがナイトオブツーに任じられて以来、ずっと苦楽を共にしている仲だけあって、そのやり取りには無駄がない。

「バーナーズ伯爵、ビクスビー子爵、ブレイスフォード辺境伯の件は？」

「近日中に私兵を率いてこちらに合流すると連絡がありました。それともう一つご報告が」

「申せ」

「新生ブリタニア政府軍のヒーゼル・エッフェンベルク中将が部下と共に当基地にお見えになりました。なんでも我が軍の傘下に加わりたいと」

「ヒーデル・エッフェンベルク……知っているぞ、その名は。あの名将が来たというのか」

ヒーデル・エッフェンベルク。第九十八代皇帝シャルルの時代より前から戦い続けた歴戦の将軍である。最初は平民出身という事で出世の機会に恵まれなかったが、実力を重視するシャルル治世下にあって頭角を現し、戦場での活躍を認められ騎士侯位を与えられ一兵卒から中将にまでなった男だ。

「よし。直ぐに私の執務室に通せ。くれぐれも失礼のないように」

「はっ」

やや急ぎ足に執務室へと戻ったレナードは鏡を見て、どこか変な所はないか確認してから椅子に座る。十分程すると扉がノックされた。レナードは「入れ」と告げるとやや緊張を強める。

入室して来たのは白髪の老将軍だった。老人ではなく老将である。皺も深く、髪も白髪で老いてはいるが、かといって老人特有の弱々しさは微塵も感じられない。老いてますます盛んとはこの男のようなモノをいうのだろう。

エッフェンベルク中将はレナードの前に立つと、慣れた動きで敬礼をする。レナードもまた同じように敬礼を返すと用意していたソファに着席するよう勧めた。

「先ずは、よくぞ来てくれた。エッフェンベルク中将。私が貴卿より遥かに階級が下だった頃より、貴卿の勇名は聞き及んでいた」

「恐縮です、エニアグラム総帥。私も閣下のような稀代の英傑に名を覚えられて光栄の意を禁じ得ません」

「世辞が上手いな、中将は」

朗らかに笑うと、従卒の少年が二杯の珈琲をお盆に載せて入室してきた。年の頃が十四、五ほどの栗毛色の従卒はテキパキと珈琲をレナードとエッフェンベルクの前に置き、会釈してから退室する。

「さて、エッフェンベルク中将。貴卿ほどの御仁が我が陣営に加わるというのは、これ以上ない吉報だが一つ気になる事があるのだが、良いだろうか？」

「なんでしょう？」

「失礼を承知で言うが……貴卿は平民の出であろう。今のブリタニアでも重宝されていた筈であるし、貴族制を復活させた所で貴卿に何の得もなかろう。何故、我が陣営に組するのだ？」

目を細め、値踏みするようにレナードはエッフェンベルクを見つめる。

エッフェンベルクという帝国きっての宿将が陣営に加わりたいと参上したという報告を受けた時、レナードはそれ以外の可能性を一つ思い浮かべていた。

それは新生ブリタニア政府側による、帝国軍に対する埋伏の毒だ。ナナリーやゼロ（スザク）ならまだしも敵側にはあのシュナイゼルがいる。エッフェンベルクという内通者を帝国陣営に送り込むことで内部から瓦解させようとしても可笑しくはない。

エッフェンベルクは名将だ。陣営に加われば恐ろしいというものだ。いざ政府側との決戦となった時、エッフェンベルクが裏切り内と外からの挟撃にあえば、如何にレナードの軍才があっても勝てる戦も勝てなくなる。

「……お恥ずかしながら、私は大変に貧乏な家庭に生まれましてな。軍に入隊したのも、生活費を稼ぐ為でした。何度かの実戦を運良く生き延び、シャルル陛下が在位された時には少尉の地位にあり、適当な所で軍を除隊するつもりでいました」

「ほう、それで？」

「いやはや、シャルル陛下のお掲げになった弱肉強食という主義主

張のお蔭でしょうな。非才の身ながら功績をたて、気づけば士官学校出でもない叩き上げながら閣下と呼ばれる地位にまで着いていました。私は妻にも倅にも先立たれ親類もおりません。この上は、総帥閣下と第百代唯一皇帝メリエル・レイ・ブリタニア陛下のご陣営に加わり戦う事が、ここまで取り立てて下さった帝国とシャルル陛下に対する最期の御恩返しと思った次第」

「……そうか。宜しい、私も一時でも貴卿の忠心を疑った自らの非礼を詫びよう。貴卿には新たに新設される第二航空浮遊艦隊司令の地位についてもらう。階級も大将に昇格させよう」

「お言葉ですが、私はまだ馳せ参じてから戦果を挙げた訳でも功を立てた訳でもありません。お気持ちは嬉しいのですが、それを受け取る訳には参りません」

エッフェンベルクは恐縮そうに辞する。

無理からぬ事やもしれない。ブリタニア軍の階級は元帥を頂点として大将、中将、少将、准将……という順であり、大将といえば数人しかいない元帥の次にある位。未だかつて平民出の大将がいなかった訳でもないが、それはあくまで士官学校を卒業した者の話。一兵卒からの叩き上げで大将というのは異例の大出世である。

ちなみにレナードはその元帥よりも上の、ブリタニア軍の全てを決定する『総帥』の地位にいるがこれは例外中の例外であり、ふつう総帥なんて職が置かれることはない。

「良い。忠義に答えるモノが必要だ。今は亡きシャルル陛下も、現皇帝たるメリエル陛下もそれを望んでいるであろう。また艦隊司令にしても、卿の能力は一つの戦艦ではなく一顧艦隊を指揮させてこそ耀くというもの。相応しい人材を相応しい地位につけることに異論を唱えらるのも困る」

「そこまで言われては……。分かりました。及ばずながら全力で任にあたります」

その言葉を聞くと、執務室の机にあるスイッチを押し部下の一人を呼び出す。

「御呼びでしょうか？」

「エッフェンベルク大将を将官用の宿舎へ案内せよ。――――――――エッフェンベルク大将。辞令は追って伝える。それまで長旅の疲れを癒しておいてくれ」

「イエス、マイ・ロード！」

部下の一人に案内され、エッフェンベルク大将が退室していく。

取り敢えずはこれで良いだろう。

エッフェンベルクに二心はない。レナード自身のワイアードギアスという超常の力に裏付けされた直感がそう告げていた。

それに優秀な人材がいて困るという事はない。量は集まったとはいえ、再結成した正当ブリタニア帝国軍はまだまだ編成に時間がかかる。兵士達にはしっかり食事と給料を与えなければならないし、兵士を指揮する指揮官やその指揮官を指揮する将なども置かねばならない。今はレナード・エニアグラムという頂点がいる事で纏まっているが、そんなカリスマの存在がなくとも纏まった集団でなければ理想的軍隊とはいえない。一人の傑物がいる事により運営可能な組織は健全とはいえないのだ。凡庸な人間がＴＯＰになっても運営できる組織を健全な組織という。そして残念ながら今の帝国軍は、レナードの目から見て健全まで後一歩というところだった。

レナードが今後の事と、この十日間完徹している事に頭を悩ませ

ていると、主任から連絡が入った。

『総帥閣下。ナイトオブツー、ランペルージ卿がお見えです』

「通せ」

五分後、その男。レナードの推薦により新たにナイトオブツーに任命された男、ライ・ランペルージが入室してきた。

「失礼します、閣下」

女性が見れば十人が十人心奪われるであろう美貌と、繊細かつ流麗な銀髪を持つ少年。ライ・ランペルージは完璧な礼儀作法で部屋に入るとレナードの前に立つ。

「それで何用だ？　卿より受け取った人事案ならば一読させて貰った。中々にいい出来だと言っておこう。お蔭で十二日目の徹夜は避けれそうだと、礼を言おう」

「いえ。その事ではなく……陛下から、これを閣下にと」

ライが手に持った物をレナードに見せる。

「それは……トロッケン・ベーレン・アウスレーゼか」

「はい。６２年物のドイツのトロッケン・ベーレン・アウスレーゼです。今日は閣下の誕生日でしょう。その事を覚えておられた陛下から、プレゼントだと」

どうやら前に陛下が「好きなものはなにか？」と尋ねられたのは

この為だったのだろう。その時は何気なく「絵画も彫刻なども好きだが、やはり一番はワインと珈琲」と答えたのだが（流石に陛下の前で女遊びが好きとは言えない）まさかこんなサプライズを用意してくれるとは。というより自分の誕生日が今日という事も仕事が忙しくてすっかり忘れていた。

「ライ、主任にこのワインを大切に保管するよう伝えてくれ。俺は陛下に御礼を言いに行かねば」

「分かりました。主任さんには僕から言っておきます」

「……ライ」

うっかり言葉を崩してしまったライをジロリと睨む。

「あっ、申し訳ありませんでした。閣下！　僕…いえ自分は！」

「フッ。冗談だ、許せ。それより主任にしっかりと伝えておいてくれ」

「イエス、マイ・ロード！」

まるで弟が出来たみたいだ、と自分らしくない考えに至ってしまい笑みが零れる。

こんな風だが、ライは知略でも武勇でも帝国軍で一二を争う才覚を持つ男だ。或いは、戦術眼ならレナード以上かもしれない。

ライにワインを預けると、仮皇宮であるガルデュエル宮殿へと向かう。

第百代唯一皇帝陛下に御目通りを願わなければならない。

人外の体力があるから今まで死にはしなかったが、レナードとし

ても出来れば十二日目の徹夜は避けたかった。
さて。一体どのように運命が転がることやら。

SECRET8　君臨者（後書き）

さ～て、取り敢えずレナード陣営が少し強化されました。
若くてピチピチのライとベテランのおっさん。足して二で割ると年齢的に丁度良いというのがなんとも。

SECRET9　灼熱の魔人

――暴力は正義すらも不正に行う。
戦争とは両者陣営共に別々の正義を抱いている。今回の内戦の場合、正当帝国軍側の正義は「衆愚政治たる現政権の妥当と専制性の復活」であり新生政府側の正義は「過去の戦争は過ちであり、これからは全国民が平等の民主制に移行する」というものだ。この内戦の興味深い所は、普通ならば専制政治を打倒する為に民主主義者が立つというのに、ブリタニアの場合、民主制を打倒する為に専制主義者が立ち上がったことだろう。

第百代皇帝メリエル・レイ・ブリタニアのいる庭園までレナードは殆ど顔パスといってよかった。勿論、変装した偽物という可能性もあるので生体認識コードを潜る必要はあるが、通常謁見するのに必要な手続きなどは一切必要がない。それは帝国の本当の指導者が一体誰なのかを示す事例の一つでもあった。事実、メリエル・レイ・ブリタニアの帝位は非常に危ないものだ。なにより彼女には親類縁者が誰もいないし、探せば彼女以上に皇室の血を濃く受け継いでいる者などいる。もしも最大の実力者であるレナードが擁立しなければ、誰も見向きはしなかっただろう。
だが擁立されているメリエル・レイ・ブリタニアにレナード・エニアグラムが忠誠を誓っていないかと言えばそうではない。これは

彼自身がやはり王者ではなく騎士であり将軍でしかないからだろう。天はレナードにおよそ人類が持ちうる全ての才覚を与えたが、唯一つ王才のみは与えなかった。ない王才を補うためには、誰かを王として主君として仰がねばならない。

庭園には一面の薔薇が咲き誇っていた。

赤に黄色、紫に白……中には人工で作り出された青薔薇や黒薔薇なんていうのもある。

今は死んだこの家の元の持ち主の趣味だったそうで、今の主も大変気に入っている薔薇庭園。レナードとて貴族、芸術的感性の一つや二つは持ち合わせている。その彼からしても、中々に素晴らしい庭園であった。

「陛下……」

レナードは薔薇に水をやる十二歳ほどの少女に声を掛ける。

「ん……おぉ、レナード！　どうしたのじゃ？」

まるで薔薇のような少女だった。流れるように長い髪は色とりどりの薔薇の中でも一層目立つシルバー。鼻の形も頬も一流の芸術家の作った彫刻のように整っている。緑色の瞳は幼いながらまるで男を吸い寄せるような魔性の色を放っており、後五年もすれば社交界の男は一瞬で心奪われるようになるであろう。ただ現在の彼女は未だ十二歳であり、白人にしては成長が遅いらしくまだまだ子供っぽさが若干残っている。そっちの気のある者なら半狂乱しそうな容姿だが、生憎レナードの有効射程は１５～３５、しかも当人の成長速度にも影響されるので、今はまだ少女体型のメリエルなら後五年はしないと有効射程に入らないだろう。

レナードは嘗てシャルルにしていたように跪き頭を垂れると、メ

リエルに口を開く。

「陛下。この度は臣の誕生の儀に際して、実に素晴らしい生命の活力を下賜して下さり感謝の意に耐えません」

「そうか、喜んでくれたか！　前にお主が酒が好きと言ってたのでな。妾からオールドカースルに手配させたのじゃ」

メリエルはニパニパと得意満面に笑う。

「成程、オールドカースルが……。あの脳細胞までしかめっ面をしている男が……」

オールドカースルという男は、本名をユアン・オールドカースルといいレナードの参謀長の任についている。下級貴族の出で階級は大将。非常に優秀なのだが全く表情を崩さない鉄仮面が偶に傷だ。

「うむ。オールドカースルにもしっかりと礼を言うのじゃぞ」

「ええ、そうしましょう」

オールドカースルが熱心にワインを選んでいたと思うと笑えるが、礼を言わねばなるまい。

「……もう直ぐ、戦争が始まるのじゃろ」

「はい。地下に隠れる雌伏の時は終わりました。現ブリタニア政府は各国との国交正常化こそ為し得ましたが、同時に民主制の移行が明文化されたことで民衆にもやや混乱が見受けられ、中華連邦や日本、ＥＵなどの諸国にしても今は戦乱の傷を癒すため、自国のこと

で手一杯。口では我等のことを非難していますが、この戦争に介入できる国力もありません。更にいえば国交正常化とはいっても、嘗ての奴隷階級と対等な関係を結ぶのは差別意識の強いブリタニア人には気に喰わないでしょう。それも時間をかければ収まるでしょうが、今は収まってません。現政権への支持率も急速に落ち込んでます」

嘗ての旧植民地の国々、特に世界一のサクラダイト埋蔵量を誇る日本と、ブリタニアはどうにか国交正常化まで漕ぎ着けた。それには戦後復興の全面的援助などもあったが、ブリタニア政府の支持率を落としたのはもう一つの条件のほうであった。その条件とは『ブリタニア現政権の被植民地に対する謝罪』。ようするに今までの侵略行為を謝れというものである。これは被征服民であった日本人からすれば当たり前の感情かもしれない。ブリタニアによる征服で名前を自由を国を奪われ虐げられたのだから。だがブリタニア人側はそうはいかない。忘れてはならない事だが、別にブリタニアは嘗ての戦争で敗北したわけではないのだ。あくまで第九十九代皇帝ルルーシュの暴走とそれの急死により、なし崩し的に植民地から撤退したのだ。ブリタニア人からしたら「どうして負けてもいないのに、弱者に頭を下げなければならない」となるのであろう。中立的見地からしたらブリタニア側が謝るべきなのだが、国民感情というものはそう理屈では収拾できないものだ。

そして国交正常化したばかりの各国もこの戦争に介入なんて出来ない。内政干渉になるという理由は勿論あるが、それ以上に各国にあるのは恐怖。繰り返すがブリタニアは戦争に負けたのではない。シャルル治世下もそうだが、悪逆皇帝ルルーシュの時代も同じ。旧黒の騎士団とシュナイゼル一派が協力して悪逆皇帝ルルーシュ率いるブリタニア軍と戦ったが、結果は知ってのとおりブリタニア軍の勝利。植民地支配を取りやめ専制性を廃したのも、あくまでルルー

シュの暴走と暗殺という要因が全てなのだから。なにより旧植民地の各国にはブリタニアへの恨み以上に恐怖が刻まれている。

首都が全壊したとはいえ依然としてブリタニア軍は世界最強の軍隊だ。国力も財力も技術力も全てが他国を圧倒している。そもそも一体どの国がランスロット・アルビオンや紅蓮聖天八極式すら超える第十世代ＫＭＦが当たり前のように実戦配備しているというのだ。ラクシャータ辺りは第十世代なんぞとっくに開発しているかもしれないが、開発が出来るのと実戦配備できるというのは全く別の話だ。

だから各国も目立った動きは出来ず、ブリタニアにしても自国の内乱を治める為に他国の協力を得るなんて出来ないだろう。そんな真似をすれば一層支持率を落とすだけだし、そうなれば得をするのは正当帝国軍である。故に、

「地下に潜む雌伏の時は終わりました。今こそ草廬を出て臥龍となる時です」

「妾はまだ未熟じゃ。これからも妾に力を貸してくれ」

「イエス、ユア・マジェスティ」

話が終わったので二三会話してから場を辞する。

庭園を出た所で丁度、様のある男からこちらに歩いてきた。

「閣下。こちらにおられましたか」

オールドカースルは黒髪黒目の地味な男だ。唯一目立つのは１９５ｃｍの長身と絶対零度の冷たい両眼だけ。レナードも余り得意な人間ではないが、その才覚もあってブリタニア軍で一角の地位を築

き上げただけあって能力は高い。

「こちらも卿を探していた。ワインのことだ。良いものを用意してくらた。礼を言おう、オールドカースル」

「陛下よりのご命令でしたので。……ところで、先日私の宿舎に匿名で電話がありましたので、その件でお話があります」

「なにか良からぬ報告でもあったのか？」

「違います。ただ……バルムンクと閣下に報告してくれ、と」

「なんだそれは？」

バルムンクといえば神話に登場する魔剣の名だ。黄金の柄には青い宝玉が埋め込まれ、鞘は金色の打紐で巻き上げられていたという。ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の主人公ジークフリートの愛剣として数々の武功をたてたことで有名だ。

「ああそうか。農業だけではなく妙なセンスを会得したようだな」

「閣下？」

「その件はこちらで処置する。下がっていい」

「はっ」

去っていくオールドカースルを見送り、レナードは腕を組む。

ジークフリート、その名を冠したＫＭＦはブリタニアには存在しないが、その名を冠したＫＧＦならばある。シュナイゼル・エル・

ブリタニアの配下となったバトレー将軍主導のもと開発された試作機。その独特の機能のためある人物にしか扱えぬ機体。そのパイロットの名は、

「ジェレミア・ゴットバルト。オレンジ農園を耕すのに飽きたか？」

同じころ、新たにナイトオブツーと任じられたライ・ランペルージは空を見上げていた。

変わらないな、と思う。

自身が生きた時代から幾百年の時が流れたが、空だけは変わらない。また数百年が経てばまた何処かで別の誰かが空を見上げるのだろうか。

「ランペルージ卿。ここにいたか」

声を掛けられたので振り返ると、見慣れた人間がいた。

「オールドカースル大将、総帥はどうでしたか？」

「心当たりがある様子だった。総帥御一人で処置すると言っておられた。それより卿はこのような場所でなにをしている？」

「少し……空を見上げてまして」

オールドカースル大将はそうか、と頷くとさっさと行ってしまった。きっと仕事がまだあるのだろう。ライはつい先ほど今日の分のノルマを終わらせたが、参謀長となると仕事量はライのそれよりも上なのは間違いない。心の中でご愁傷様と言っておく。

「悪逆皇帝ルルーシュ……ブリタニアの魔人レナード……黒の騎士団……そして、ブリタニア。はぁ僕らしくもなく鬱になってるな」

既にもうギアスの紋章を映さないであろう瞳を抑える。どんなに力を込めようと、もうこの瞳があの光を灯すことはない。呪われた、王の力。

「やる事は変わらない、か。いつの時代も。僕も頑張らないとおちおち眠らせてくれないからな」

過ぎ去った歴史にＩＦはない。だがもしもあの時、レナード・エニアグラムではなく別の男に出会ったらどうなったのだろう。

ライは過去に思いをはせる。

目を覚ますと、そこは何処かの研究施設だった。

用途の分からない薬品や怪しげな機材が大量にある。

「……だれ……だ……」

この研究所にいたのはライを除けば一人だけ。全身を白い包帯に包まれた異様な男。包帯の隙間の地肌には夥しい火傷の跡が垣間見えた。まるで地獄の業火にでも炙られて、それでも死に切らず蘇った魔人。そんな印象を受けた。醜い火傷の後を包帯を隠した中、蒼い両目だけが爛々と輝いている。

「俺は――――――――――――」

見た目にそぐわぬ綺麗な声だった。
地獄の魔人みたいな容貌とは対極の、貴公子のような声色だった。
「レナード・エニアグラム」

SECRET9　灼熱　の　魔人（後書き）

実はレナードはＣＣＯ化してましたｗ
次回はＣＣＯ化したレナードとライの話です。

SECRET10　狂王が降った日

――困難な情勢になって初めて、誰が敵か、誰が味方顔をしていたか、そして誰が本当の味方だったかわかる。
自分が有利なときに人々が味方するのは自然である。誰しも優位な側につきたい。戦争でも、敗者になるより勝者になる方が億倍良いだろう。だが不利なときに味方するというのはメリットが少なくデメリットの多いことである。不利なときに味方してくれる者は情がメリットを超える真の味方だということに違いはない。或いは、不利と有利が逆転する事を知る知恵者か。

包帯男がレナード・エニアグラムと名乗った瞬間、脳内に様々な記憶が戻ってくる。
数百年前ブリタニアの地方領主と日本の貴族との間の子として生を受けた事。他国人の血が混ざっていた為に迫害された母と妹を守るために、謎の人物より『ギアス』という力を手に入れ王となった事。そして絶対遵守のギアスが暴走し……。

「う……ぁ……」

皆殺しにしろ。

士気をあげる為に何気なく言った一言がトリガーとなり、その惨劇は始まった。軍民問わず領民全てが敵を皆殺しにする為、狂ったように戦った。その中には一番守りたかった妹や母もいた。止めたいと思い必死に制止命令を出したが無駄。絶対遵守の力により下された命令は命令を完遂するか死ぬまで終了することはない。

そして国は滅んだ。母も妹も死に、自分も死のうと思ったが『契約』でそれは出来なかった。だから眠ったのだ。あの神根島で。覚めない眠りについて、自らの記憶を消して。なのに、

「主任。こいつ、様子が変だけど大丈夫なのか？」

「記憶が突然戻った事による混乱が生じているのでしょう。直ぐに戻ります」

研究所に知らない女性が入ってきた。レナードと名乗った包帯男の仲間だろう。

そうだ。神根島での眠りを妨げたのはバトレーという男だ。研究材料として捕獲されて、知識を埋め込まれ体を弄られた。という事は、この二人はバトレーと同じ、

「僕は……」

どうして記憶が戻ったのかは分からない。

だけど、ここにいたら駄目だ。

逃げるのはそう難しい事じゃない。

ただ命令すればいいだけだ。

絶対遵守の力を、行使すればいいだけ。

「ライが命じる。僕を――――――――――――がっ！」

言い切る前に、腹に衝撃がきた。それが殴られたのだと理解した時は、地面に叩きつけられていた。胃が逆流する。もし何か食べていたら吐いていただろう。

「ギアスを、使おうとしたな。という事は、間違いないようだな主任」

「はい。私はここのデータをコピーし次第消去しておきます。日本政府如きがここのデータを解析できるとは思いませんが、万が一ということもありますので」

「頼む。――――――――――――――ああ、ライと言ったか」

「僕を、如何する気だ？」

「本当は大した用はなかったんだけどな。主任がエリア１１……今は日本か。この日本にある研究所にバトレーとかいう男が面白いモノを持ちこんでいた、という噂の確認にきただけで別になにか特別目的があった訳じゃあない。ただもし本当にそんなモノがあるとして、日本政府に渡れば色々と面倒だから念のために消去しにきたわけだ。お前にあるギアスを解除して記憶を取り戻したのも、培養液から出したのも単なるおまけ」

エリア１１が日本？

どういう事だ。日本は皇歴２０１０年にブリタニアの侵攻を受けて植民地になったんじゃないのか。それに口振りからするとバトレーの仲間という訳じゃなさそうだが。

「なんにせよ時間がない。ここに来るまでやや派手な事もしたし」

「待て、何を――――――――――」

「おやすみ」

恐らくは予め、睡眠薬などを投与されてあったのだろう。
眠りにつく前に聞いた言葉と同じ言葉で、ライは暗い眠りの世界にと落とされていった。

次に目を覚ました時は、研究所ではなく自動車の中のようだった。
車が走行しているのは何処かの田舎町らしい。ビルなんて近代的建物が全くなく、畑ばかりが広がっている。
なにやら頭が痛い、と思ったらまた新たに記録が追加されていた。またあの研究所で記憶を転写されたのだろう。現在の世界情勢などが頭に叩き込まれていた。
ライは後部座席に横にさせられていた。体を起こすと助手席に座っていたレナードに声をかけられる。

「良い夢見れたか？」

「いきなり眠らされて、良い夢なんて見れない。それより一体、此処は何処なんだ？」

「ブリタニア」

「！」

あっさりとレナードは言った。
嘘ではないだろう。窓から見える風景は日本の田舎というよりは、ブリタニアの田舎のもの。

「降ろしてくれ。僕は神根島に戻らないといけない」

「へぇ。今まで寝てたのにまた眠りたいのか。お前……まさか寝るのが趣味ってタイプ？」

「そうじゃない。知ってるかもしれないが、僕には絶対遵守の力がある。その力が暴走すれば、」

「すれば？」

「……酷い、ことになる」

「あー、虐殺ショーでも始まるってことか。あるよな、それ。普通なら人一人殺せないような性格の人間が、一転して狂ったように虐殺命令を下す。確かに酷い事だ」

どこか現実味のある、哀しみを秘めた声が車内に響いた。

「そこまで理解しているなら、何故……？」

「単純だよ、少年。もうお前がギアスを使えない。使っても意味がないようになってるからだ」

「はぁ？」

思わず間抜けに口をポカンと開けてしまう。

「試に俺でも運転してる主任にでも、適当に命令してみればいい。やればわかる」

「……」

半信半疑のまま、ライはレナードに「ふもっふ」と言えと命令してみたが、何も起こらなかった。ライの絶対遵守の命令は一人につき一度しか使えないという弱点はあるが、レナードにギアスを使った事は一度もない。という事は、本当に。

「ギアスが、なくなってる？」

「正確には使えないようになってる、だ。ギアスには結界型のように防ぐ方法なんてないようなものもあるが、お前のは聴覚作用型。お前の生の声が相手の耳に入ることで初めて効果を発揮する。だがこれは視覚作用型にも言える事だが、通信機や映像越しではギアスは作用しない。結論を言うとお前の喉のあたりを弄った。お前の口から出る声は肉声であって肉声ではない。故に、ギアスを使う事も出来ないわけだ」

「そんな事が本当に出来るのか？」

「主任が一時間でやった」

開いた口が塞がらないとはこのことだ。

自分があれほど苦悩したギアス。それを主任と呼ばれた女性は一時間で無力化してしまった。現代の技術力が凄いのか主任が凄いのか。或いはその両方か。

「なんにせよお前を神根島、日本に戻すというのは土台無理だ。大体、お前のような戸籍も何もかもない人間が日本に一人で戻るなんてのも無理だし、大体日本便なんて今の情勢じゃ一本もない。ギア

スを使えばどうだか分からないが、絶対遵守なんて力を持つ奴を放置するほど、俺もお気楽じゃあないしな」

「なら僕だけ日本に置いてきてくれれば……」

「それでもお前が捕まれば、ブリタニアにとって色々不利益な情報が流出しかねないんだよ。というか神根島の遺跡は破壊されてるし、お前一人のために他の遺跡に出向く義理もないし、殺さなかっただけ有り難く思え」

「別に、殺してしまっても構わなかった」

永い眠りにつく前。本当はそうつもりだったのだ。

契約により死ねなくなってなければ、間違いなくそうしただろう。

「死んでもいいクチか。俺としては他人に迷惑かけない自殺なら、実行するのも個人の自由だと思うが、生きてれば楽しい事もあるものだ。折角、プチタイムスリップしたんだから現代を愉しまなければ損だと、俺は思う」

「楽しみなんて言われても……」

「俺を見ろ。味方の新兵器の爆発に巻き込まれて全身大火傷。主任の迅速な処置で死ぬのは免れたが半死半生。どうにか意識を取り戻すと、後遺症で体が思うように動かず戦友と主君は死んでいた。リハビリのお蔭で漸くまともに動けるようになってみれば俺の愛した国は滅んでた。それでも楽しい事はある。生きてれば美味い酒が飲める。美味い珈琲が飲める。良い女が抱ける！　これで十分、生きていく価値はあるものだ」

「国が亡ぶ……それに戦友か……」

嘗て自分にも国があり戦友がいた。

だけど、ギアスと愚かな自分自身により国と戦友は滅んで、そして自分自身は眠りについてしまった。だがもし……もしもあのまま生きていれば、自分にもレナードの言う生きていく価値はあったのだろうか。

「難しく考えるなって言っても無理だろう。後々適当に悩めばいいさ。達観するのは年寄りの特権、悩むのは若者の特権。そんな事より……到着したようだな」

車が止まった。

ライは窓の外を眺めるが……何だ此処は？　建物どころか人っ子一人。民家の一つもない。完全な山奥。到底車で入られるような場所ではなかったが、そこはブリタニアの技術力に不可能はないのだろう。主任という出鱈目もいることだし。

「着いてこい。面白いものを見せてやる」

主任は黙ってレナードに従う。

ライは一瞬従順したが、やはりレナードに着いていった。

向かった先は何の変哲もない草むら。その中の一か所だけ禿げている部分に立ち、一分後。

「うっ、とっ！？」

目玉が飛び出るほど驚愕する。

急に地震が起きたような地響きがしたかと思うと、レナードの立つ場所から５ｍほどの地面が割れ、下へ続く階段が出てきたのだ。

「なななななっ……！」

「さて、行くぞ」

「ちょっと待った。これは一体全体！？」

レナードは話しながら説明すると言うとさっさと先に行ってしまう。置いてかれる訳にもいかないので、慌てて後を追った。

「昔、シャルル陛下より密命を受けてな。使い道ははっきり教えては下さらなかったが、必要になるかもしれないとだけは言っておられた。今思えば、こういう日を予見しておられたのかもしれんな」

その後、階段を降りた後も二十三十のトラップがあったが、レナードはあっさりその全てを無力化していった。そして辿り着いたのは、巨大な扉。主任にもライにも聞かれないよう、何かを呟くとその扉がギギギギという音を軋ませながら開いた。

「これは――――――――――！」

声を失った。

目の前にあったのは、黄金の壁だ。巨大な壁。一体どこまで大きいのか、金の壁は悠然と存在感を示しながら堂々とそこにあった。

いや……違う！　これは壁じゃない！　金のインゴットだ！　もはや数えるのも馬鹿らしい程の金塊の山！　恐る恐る触ってみる。ブリタニア辺境の王としてこういう物にも触れた機会は多々あったから分かる。この金塊は、黄金の壁は……本物だ！　正真正銘の本物！

「奥には紙幣もある。金塊と紙幣。合計すれば１０００兆Ｂ£は軽くあるだろう」

１０００兆といえば戦前の日本の国家予算の１０倍以上だ。
こんな量をこんな場所に貯蓄するとは……つくづくブリタニアという国家の出鱈目さが分かる。侵略戦争で得た利権の数々は、ブリタニアという国を最盛期を超えた最盛期を迎えさせるに十分だったのだろう。

「これを、どうするつもりなんだ……？　こんなバカみたいな金」

人一人が１００００年間は遊んで暮らせそうな額。
これだけの金があれば、レナードにはそれこそバラ色の人生が待っているだろう。

「俺がもし隠遁生活を送るなら、それはもう優雅に暮らせるだろうな。幸せになるのは難しくない。ブリタニアの民衆にはそれなりに名声もある。軍に入れば元帥、政界に入れば閣僚になれる。だが俺にも矜持がある。意地もある。プライドがある……この金は、神聖ブリタニア帝国を復活させるのに使う。その為の金だ」

「ブリタニアを、復活……？」

やるかもしれない。この男なら。
現在ブリタニアにおいて叛乱の目は悪逆皇帝ルルーシュにより刈り取られ、爆発できないまま放置されている。新生ブリタニア政府の治世、民衆や元貴族にしても不満を感じることはあるかもしれないが、かといって大規模な反乱や内戦にまでは発展しないだろう。
それでも。もしも一人、途方もない才覚を持つ男が指導者となれば。その指導者に満足な財力が加われば。

「卿はどうする？　嘗てのブリタニア地方領主、歴史に恐怖を刻んだ狂王ライ。如何に正統とはいえず一地方の領主でしかないとはいえ貴卿は紛れもない皇室の血を継ぐ者。故に私も礼を示し、卿をここに連れてきた。その上で、貴卿は、どうする？」

「僕は……」

何が正しいのか。

絶対的な善がこの世界に存在しない以上、それは無意味な質問だろう。

だから自分の道は自分で選ぶべきだ。ならば、共に戦ってみようか。生きていれば生きてる価値があると語った男に。ブリタニア最後の英傑に。狂王としてではなく、一人の人間として。この世界で生きてみる価値を探すのも、良いかもしれない。

「戦おう。何が正しいのかは分からないけど、君の為に戦おう」

失った色を取り戻すために。

本当に取り戻せるのかを確かめる為にも。

この日から、ライはブリタニアの姓を捨て一人の人間となった。

嘗ての悪逆皇帝ルルーシュがただの人間だった頃の名。ランペルージを姓として。

SECRET10　狂王　が　降った　日（後書き）

主任が元医者でギアス響団の技術者という設定がばりばり生かされてくる外伝。レナードもワイアードギアス能力者としての生命力がばりばり生きてます。

レナードも外伝だと騎士というより将軍や指導者、政治家や謀略化としてのほうに重きを置いてます。
Ｂ£（ブリタニア£）通称ブリポンに関してはドラマＣＤに一瞬だけ登場した通貨名です。為替とか設定するのも面倒な上にややこしいので１Ｂ£＝１円だと思って下されば幸いです。

SECRET11　朋友　と　朋友

『不老不死、死者蘇生。その二つは人類にとって未来永劫の夢である。生命倫理のルールにおいては間違いかもしれない。実際の不死者は死を望んだかもしれない。だが古来より全てを手に入れた支配者が最後に臨んだのは不老不死であった。そして大事な人を失った多くの者が死者の復活を願っただろう。私自身もそうだった。もし仮に人が空を飛びたいと願わねば空を飛ぶことは叶わず永遠に重力に逆らうことはなかっただろう。ならば死者を蘇らせたいと、永遠を生きたいと願えば、やがてその望は叶うのかもしれない。少なくとも、そう思っていた方が楽しいし浪漫がある』ｂｙ，レナード・エニアグラム

レナード・エニアグラムは参謀長オールドカースル大将からの報告を受けた後、従卒なども全て下がらせ書斎にこもっていた。

一人の男との、連絡を繋げるために。

「久しいな、ジェレミア。こうやって落ち着いて話をするのは何時以来だ？」

『私の記憶が正しければ、君がエリア１１に派遣されて以来だろう』

「もうそんなになるのか……。どうだオレンジ畑の調子は」

『新しい肥料の調子が良いようだ。アーニャもよく働いてくれている。どうだ、前に収穫したオレンジを送ろうか？』

「頼む。世界一最強のオレンジが作るオレンジだ。興味はある」

『しかし…あれだな。まさか農作業というのがあれほど苦労するものだとは思わなかった。雨にやられ風にやられ、オレンジが駄目になったことが何度あったことか……』

「戦争もオレンジも、自然には勝てぬものだよ」

『その自然を逆利用されれば堪ったものではない』

「ナリタのように？」

『私も、もう埋められるのは御免だ』

「出来れば埋められるのは死んだときだけでいたい。大体、人間というのは陸の生き物だよ。空を飛びたいと願ったから飛行機などは生み出されたが、やはり陸の生き物だ。陸に変える生き物。土の生き物は農作物と土竜で十分」

『魔人はどこの生き物なのだね、朋友よ』

「戦場の生き物だよ、朋友よ」

電話越しに両者が笑いあう。物騒な会話が混ざりながらも、どこ

となく楽しげに懐かしい会話を楽しむ。まるであの時。ブリタニアが最も輝いたあの時に戻ったみたいだった。

「さて、ジェレミア・ゴットバルト。卿がややこしい真似をしてまでこの私に連絡をとったこと、まさか互いの近況や昔語りをする為ではなかろう？」

『その前に断っておくが、このジェレミア・ゴットバルト。ナナリー様の下に行かせて貰おう』

レナードがすぅと目を細める。だが不機嫌そうではない。寧ろどこか楽しんでいる様子すらある。机の上のペンをくるくると回しながら、声を洩らす。

「それでは戦場で殺し合う羽目になるな。ＫＭＦの模擬選やシミュレーターなら幾度もしたことがあるが、生で殺し合うのは初めてだった。ジークフリート、あのＫＧＦ。主任の話だと壊れたみたいなことらしいが」

『一応ルルーシュ陛下がもしもの時のためにと、修理して下さったのがある。そういう卿こそ、マーリン・アンブロジウス・ラグナロクだったか。流石は純血派きっての騎士！　あれほどのＫＭＦを用意するとは流石だ。私も純血派のリーダーとして鼻が高い。はははははははは！　オール・ハイル・ブリタニア！』

「純血派とは、まだあったのか？」

『何を言う！　皇族への忠誠と祖国への愛があれば、何時いかなる時どんな場所でも純血派だ。レナード、君は違うのかね？』

「忠誠がなくて逆襲戦争なんて起こすとしたら、俺は道化だよ。ナナリー、か。マリアンヌ様とルルーシュのためか？」

『……このジェレミア・ゴットバルト。レナード・エニアグラム、君を最高の朋友と思っている。しかし私が忠誠を誓いしはマリアンヌ様でありルルーシュ様であり……ルルーシュ様の御意志を受け継がれしナナリー様。君が帝国への忠誠を忘れず、立ち上がったように、ナナリー様の危機とあっては呑気に農園を耕す訳にもいくまい。それより、君こそナナリー様とルルーシュ様とは古くからの友人ときいているが？』

「ノンノンノン。間違ってる、間違ってるぞジェレミア。ナナリーは兎も角、ルルーシュは友人ではなく悪友だ。それと投降や降伏を呼びかけても無意味だ。降伏するくらいならば、最初から隠居していればよかっただけの話。なにより一度戦端が開けば、閉じるにも血を見ずにはすまない。古来、戦争とはそういうものだろう」

『……白状するが、私の要件というのもその件だ』

「降伏勧告？」

『違う。ナナリー様は貴卿と会談の場を持ちたいと。戦わずして解決するならば、これ以上のこともなかろう』

「正論だ。戦わずして勝つことこそ兵法における最上策。話し合いの場をもつことに対して私にも異論はない。寧ろ、そういう場をもたずして全面戦争に突入するなど愚の骨頂というものだろう。私は非戦論者ではないが武力信仰者でもない。ナナリーに伝えてくれ。レナード・エニアグラムは会談に臨むと。ただ直接ではなく映像での会談にしてもらいたいが」

『暗殺を恐れるのか？』

「馬鹿が。直接会えばキスして抱きしめてしまいそうになるだろう？　それを避ける為だよ、ジェレミア・ゴットバルト卿」

『了承した。ではナナリー様には全力でそうお伝えしよう。……さらばだ、レナード』

「俺が言うのも何だが、頑張れよ」

通信が切れる。

そして二人の道は完全に分かたれた。

暗い廊下を、闇よりも暗いマントを羽織った男ゼロは歩く。

そして辿り着いた場所の扉を開けると、中に入った。

「おやぁ～、スザクくん。こんな場所に一体どんなようだい～」

『なんのことかな、ロイド・アスプルンド技術官。第一、君の上司である枢木スザクは既に死んだだろう。ここにいるのは私、ゼロだ』

「そうだったねぇ～。まぁ僕にはそういうのどうでもいいんだけど。ところでスザクくん……じゃなくてゼロ。さっきの問いかけをもう一回するけど、どういう用事だい。今を時めく君が、こんな一技術者のところに」

『現存する唯一の第十一世代ＫＭＦ、マーリン・アンブロジウス・

ラグナロク。アレに勝てるＫＭＦを用意して貰いたい』

「第十一世代ＫＭＦ、ねぇ」

ＫＭＦの歴史は長い。

第一世代、第二世代の人型未満。ガニメデに代表される漸く人型になり始めた第三世代。

初めて実戦配備されたグラスゴーなどの第四世代。グロースター、サザーランドなどの対ＫＭＦ戦も想定にいれた第五世代。ランスロットを最初とする第七世代。そしてエナジーウィングを搭載した第九世代。高性能ＡＩを搭載した電子戦能力を高めた第十世代。

「けどね、あのＫＭＦ。第十一世代でも第十一世代じゃないと思うよ」

『というと？』

「フレイヤシステム。あれを単純な爆弾にすることはアンチフレイヤシステムが完全に完成した今となっちゃ無理だよ。だけどそれを動力源にして戦艦やＫＭＦに搭載しようとしたのが、今ある第十一世代ＫＭＦの構想なんだよ。僕も一枚噛んでるけどね」

『その事なら私も熟知している』

「技術的にフレイヤのエネルギーをＫＭＦに搭載させる所までは成功してるんだよ。だけどフレイヤのパワーを動力にしたＫＭＦは操縦性や機動力なんてものが最悪になっちゃったんだよ。それはもう人間が全然乗りこなせないくらいね。理論上の数値だけでも人間が乗れば確実に死亡ってなってる」

ロイドがモニターに数値を表示する。
成程と思う。確かに人間が乗れば体に掛かる負担で大変なことになるだろう。
戦艦に搭載するというデータもあったが、やはりパワーが強すぎてまともに動かせないようなものだ。これでは兵器として失格である。

「第十一世代ＫＭＦの構想としては、有りすぎるパワーを抑えて人間に扱えるような所かな～」

『それは理解したが、マーリン・アンブロジウス・ラグナロクが第十一世代であって第十一世代ではないとはどういうことだ？』

「……第十一世代はフレイヤの力を抑えて、誰にでも扱えるようにするというもの。なら第十二世代は？　簡単だよ。フレイヤによる全開のエネルギーを発揮させても人間が扱えるようにする。それが今のところの第十二世代の構想だよ」

『なら、レナード達は完成させたのか、第十二世代までのＫＭＦを！』

だとしたら大変な事だ。
現在ブリタニアでは第十世代までのＫＭＦしか配備されていない。だが相手が既に第十二世代ＫＭＦの完成にまで漕ぎ着けているとしたら、

「その心配は無用だよ。彼等も第十二世代ＫＭＦの開発は出来てないよ。現代の技術力じゃ、フレイヤを搭載したＫＭＦのエネルギーによる体の負担をどうにかする事は無理だからね」

『という事は、まさか？』

「大正解～！　きっと彼、フレイヤを搭載したＫＭＦのパワーを生身で耐えちゃってるんだね～。本当に良いパーツだなぁ～」

成程、第十一世代であって第十一世代でないか。

安全対策が施されていないから括りとしては第十一世代。だが性能自体は第十二世代。

紛れもない。現行最強ＫＭＦ、マーリン・アンブロジウス・ラグナロクのパイロットも、やはり現行最強ということだろう。

『そうか。それでマーリンに対抗できるＫＭＦは、作れるのか？』

「だから第十二世代ＫＭＦはまだ現在の技術力じゃ無理だよ。近い内僕が完成させる予定だけどね」

『分かった。失礼した、アスプルンド技術官』

ゼロは踵を返す。

出来れば全面対決の前に互角の機体を用意して欲しかったが、ないのでは仕方ない。

「ちょぉっと待った～！」

『まだ、なにか？』

ゼロが足を止める。

「むふふふー。確かに第十二世代は開発不可能だよ。でもね、ここになんと！」

ロイドが研究所の奥にあるシャッターを開いた。
そこにあのＫＭＦがまるで主の帰りを待ちわびていたかのように鎮座している。
純白の騎士。ナイトオブゼロ、枢木スザクの搭乗機。血に呪われしＫＭＦ。

「名前はランスロット・レクイエム～。おめでとぉ～！　またまたデヴァイサーの出番だね！」

SECRET11　朋友　と　朋友（後書き）

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏのアニメが始まりましたね～。個人的に青髭＆ａｍｐ；龍之介に期待大ですｗ

SECRET12　帝国の残滓

――――罰せられるなら、子羊より親羊を盗んだほうがよい。
１００円程度のものを万引きして捕まるくらいなら、宝石店からダイヤモンドでも盗んだ方がいい。捕まれば罰せられるのは変わらないが、それならばメリットが大きい方を選んだ方がよいのだから。だが恐ろしいのはリスクを恐れぬ者だ。自分の命を最初から捨てている者ほど性質の悪い殺人者はいない。

ブリタニア暫定代表であるナナリーはこの時期、非常に多忙であった。
レナードの起こした逆襲戦争、それによる人材の流出。ナナリーとしては元貴族の殆どがレナード側に組するのは予想していたが、それ以上に厄介なのは軍部や政界の中枢を担っていた者達が野に下り、レナードにつくことだった。

「ブリタニアは良くも悪くも弱肉強食の国だったからね。確かにナンバーズではない平民も貴族階級に虐げられる事は少なくなかった。だけど悲しいかな。実力のある平民出身の者達は、功績や武功を重ねて貴族階級に成り上がることが出来たんだよ。そうした彼等にと

ってみれば、努力と実力によって漸く爵位を手に入れたのに、その貴族階級をなくしてしまった今の政府は許せないものだろうね」

というのはシュナイゼルの弁だ。

成程と思う。

歴史上腐敗した専制政治や貴族政治が民衆によって打倒されるのは少なくないが、今のブリタニアの内戦の実情はそれと異なる。大抵、腐敗した専制政治というのは特権階級をある者が実力もない癖に重職につき、平民階級や奴隷階級にいる者を虐げるものが殆どである。しかしブリタニアは確かに弱者を虐げる側面をもっていたのは否定できないし、現にシャルル統治以前はそうだったが、シャルル治世下のブリタニアというのは平民階級でも実力さえあれば貴族階級を手に入れ重職につける時代。中でもそれは目立った功績を立てやすい軍部において顕著だ。現に平民から功績を立てて騎士侯、男爵、子爵と出世を重ねた男もいるし、レナードに組したヒーゼル・エッフェンベルクなどは一兵卒から中将にまで成り上がった猛者だ。

そんな実力で爵位を手に入れた者達からしたら、謂わば特権とは自らの力で勝ち取ったものであり、贅沢をするのも様々な特権も当然な権利だと思うのも無理からぬ話だ。そしてそれを力ずくで排除した悪逆皇帝ルルーシュと、ルルーシュ亡きあと平等を謳った現ブリタニア政権を恨むのも当然と言えば当然といえる。

しかし本来なら、そういった不満は爆発する事はなかった筈だった。

彼等は実力があるから貴族となった。それ故に理解できる。下手に自分達が現政権に反旗を翻しても意味はないということを。彼等も反旗を翻し失敗するくらいならと、現政権でもそれなりに良い暮らしが出来るのだから妥協しようという流れになっていた。

だが彼等のもとに高い成功率を予感させる男が現れてしまった。

それがレナード・エニアグラム。幾度の戦場で常勝無敗を重ねたブリタニア屈指の英雄。
実力・血統・実績。この三拍子が揃っていただけに、レナードは主義主張も目的も違う者達を纏められることが出来た。

現政権の代表についているナナリーとしては、個人の感情ぬきでもレナードとは戦いたくはない。過去の戦歴を見れば分かるが、レナードはビスマルクを除いた殆どのラウンズと違い、前線でＫＭＦに乗って戦うだけでなく、実際に全軍の指揮をとることは珍しくなかった。ブラックリベリオンの後、本国に戻ったレナードは局地戦含めて二十三の戦場に赴き、その全てにおいて勝利してきた。確かな実績に裏付けされた実力。これが率いる帝国軍と戦えば、仮に勝利したとしても大損害を受ける事は間違いないだろう。そうやって国力が低下すれば、十年二十年先にブリタニアへの復讐に燃える各国が戦争を仕掛けてくる、なんて事態も起こりえるのだ。
個人的な感情を言わせて貰えば、幼馴染であり仄かな恋心を抱く相手と殺し合うなんて、あのルキアーノでもなければしたい筈がないだろう。

故にナナリーがすべきなのは、どうにかして全面戦争に突入する前に、この内戦を適当な形で治めることにある。ナナリーの思想や持論としては、新しいブリタニアに特権階級やそれによる差別なんてあってはならないと思っているが、その思想を誇示して内戦状態になると言うのなら話は別だ。思想と国民の命なら、思想をどぶに捨てても国民の命を選ぶ。ナナリー・ヴィ・ブリタニアはそういう女性であった。

「ナナリー様、お時間です」

ナナリーがランペルージ姓を名乗っていた時から色々とお世話に

なっていた、メイド兼ＳＰである篠崎咲世子が告げる。
とうとう来たか。
ナナリーは覚悟を決める。
これから相対するのは幼馴染で密かに焦がれた相手である青年ではない。
レナード・エニアグラム。帝国軍総帥にして宰相、事実上の独裁者として君臨した常勝無敗の騎士にして将軍。
ナナリーはそっと私情や私心を胸の奥に封印した。

咲世子に車椅子を引かれて到着したのは、現在のブリタニアを動かす閣僚達の待つ会議室だ。ただしナナリー含めて十五人いる筈の閣僚は、レナード側に四人が走ってしまい現在は１１人だ。そのこと事態は苦慮すべきことであるが、不幸中の幸いというべきか残った閣僚は奇数だったので決議には支障がない。
閣僚には元の身分も様々な者が集っていたが、中には元帝国宰相であり代表ナナリーの知恵袋もかねているシュナイゼルの姿もあった。

「ナナリー代表、そろそろ……」

閣僚の一人がナナリーに告げる。

「そうですね。全員が揃ったようなので、咲世子さん。お願いします」

咲世子は黙ってその指示に従うと、会議室にある巨大モニターを繋ぐ。
あの男との、会見に臨むために。

パっと画面が切り替わると、モニターに純白の騎士服と純白のマントを羽織った青年が浮かび上がる。
帝国総帥レナードだ。
『ナナリー皇女殿下におかれましてはご機嫌麗しく。こうして会話するのは第二次トウキョウ決戦以来となりますね』
「一つ訂正して下さい。私は代表であってもう皇女ではありません」
『いやはや相変わらずお若い。貴女がそう思われようと、我々にとって今も貴女は紛れもない、偉大なるシャルル陛下の血を受け継がれた御方なのですよ。お分かりになられませんか、麗しの皇女殿下(プリンセス)』
画面の向こうのレナードが薄く微笑む。
そこいらの女性ならそれだけで心奪われてしまう魔性の魅力を放っていたが、ナナリーはそれで心奪われるほど安い女性ではない。
「本題に入りましょう。単刀直入に言いますが、私は正当帝国軍との和平交渉を行いたいと思っています」
閣僚達の間にざわめきはない。
既にこのことは会議で決議済みのことだ。
『先日、私の古い朋友からもそういう伝えがあった。結構ですナナリー殿下。私も武力信望者でも口の聞けぬ蛮族でもない。して和平交渉というからには無条件降伏を要求するようなものではないと、私は期待しても良いのですかな?』
「勿論です。今から送るデータを閲覧し、ご考慮して下さい」

ナナリーの合図を受けた咲世子がそのデータをレナードに送る。
受け取ったデータをレナードは柔らかい表情で眺めていくと、

『ほほう。ブリタニアにおける立憲君主体制への移行。第百代皇帝にはメリエル陛下。この私、レナード・エニアグラムには主席元帥の位。そして貴族制の復活と貴族議会の開設』

「勿論、嘗てのブリタニアのような貴族への様々な特権や絶対的な主君の権限もありません。ですが法律のもと、貴族階級と皇帝の位が復活する事になります」

これが最大限の譲歩だ。
少なくともこの案を摂政たるレナードが呑めば、戦争は免れるし名ばかりとはいえ貴族階級と皇帝の位は復活することになる。もしかしたら時代を逆行させるような事かもしれないが、嘗ての不平等を是とするブリタニアよりはましだろう。だが、

『ふふ、ははははははははははははっ！』

「何が、可笑しいのですか？」

突然に笑い出したレナードにナナリーが問う。

『ナナリー殿下、素晴らしい譲歩案だ！　貴族制は名ばかりとはいえ復活し、皇帝の位も残る！　だからこそ謂わせて貰おう。貴女は、大変な、それはもう大変な失策を、大失策を犯したッ！』

「それは、なんでしょう？」

『悪逆皇帝ルルーシュにより我が帝国は破壊された。木端微塵に、

バラバラに引き裂かれた！　しかし帝国の残滓は残っていたのですよ、麗しの皇女殿下（プリンセス）。貴女は悪逆皇帝ルルーシュ亡き後、帝国の残滓を萃め一つの王冠にし、皇帝の位につくべきだった。そうすれば貴女が皇帝として民主制なり立憲制への移行を命じれば、この私は騎士として、どんな思想を抱いていたとしても従わざるを得なかっただろう。だが！　帝国の残滓を萃めたのはこの私だよ、このレナード・エニアグラムなのだよ！　そして王冠は既に貴女のもとにはなく、我が主君たるメリエル陛下にあるッ！　そして帝国の残滓を萃め鍛えし剣は血に飢えている！　もはや血を見なければ静まらない！』

「交渉は、決裂と？」

『現実問題、悲しいかな。人間というのは一度も戦わずに降伏することを良しとしない、愚かな生き物なのだよ。もし私の抜いた剣を鞘に収めたくば、貴女方が全面的に降伏するしかない』

「絵空事です」

『それはそれは。だが良く考えて下さい、皇女殿下。我が帝国は皇族を害そうなどとは考えません。もし非を認め、投降されるのならば、帝国はナナリー殿下を宰相に任じ、シュナイゼル殿下を副宰相としましょう。そしてコーネリア殿下には帝国元帥の印を。民主制という衆愚政治の中にある権力より、こちらの方が魅力的とは思いますが。如何か？』

「私が権力に媚びると思うのですが？」

『思いませんね。ではこれで和平交渉は決裂ということになりますな、皇女殿下。次に会う時は降伏文書調印の日ですか？』

「いいえ。次に会うのは戦場でしょう」

ナナリーはきっぱり宣言した。

しっかりと両目を開いて、レナードの両目を見る。

『ほう。ナナリー殿下、貴女が私を討つと』

「ええ、まさか私が躊躇うとでも思いましたか？　無用な遠慮です。レナードさん、貴方が逆襲戦争を起こすと言うなら叩き潰すだけです」

『……それでこそ。そうあってこその、ナナリー・ヴィ・ブリタニアであるか』

映像が途切れた。

レナード側から一方的に切られたのだろう。

ともあれ、これでレナード・エニアグラムとナナリー・ヴィ・ブリタニアの道は決定的に分かたれた。

SECRET12　帝国　の　残滓（後書き）

レナードとナナリーの交渉決裂です。
ナナリーもルルーシュの妹でシャルルとマリアンヌの娘ですからね。
度胸なら決して負けません。

SECRET13　乾杯

――――進歩とは反省の厳しさに正比例する。
生きていると人間は必ず失敗する。しかしそれを反省するか否かは人其々だ。大した反省もせず同じ過ちを繰り返す者もいれば、深く反省して二度と同じ過ちを犯さぬ者もいる。失敗を糧とするのは反省ある人間のみであり、反省が人を進歩させるといっても過言ではないだろう。

新生ブリタニア政府代表ナナリーとの通信を切った後、レナードの執務室には沈黙が漂っていた。レナードは椅子を回転させ、集まった一同を見渡す
この部屋にいるのは、レナードだけではない。現在の帝国軍を担う軍の重責たち、ナイトオブツーに任じられたライや主任を始めレナードの腹心とでもいうべき者達が集まっていた。
「……この中で、先の和平案に納得出来ない者は残れ」
沈黙。
出ていこうとする者は誰もいない。

唯全員が真っ直ぐにレナードを見ている。
やがて部下の一人。黒人の大男が前に出て、全員の意見を代表した。

「総帥閣下！　この期に及んで何を怯える必要がありますか！　閣下はただ我等に御命じになってくれれば宜しいのです！　敵を、衆愚政治を討てとッ！」

エヴァン・グレイ中将が高らかに言うと、他の将軍たちも頷く。
成程。
どうやら離反者はいないようだ。
レナードは笑みを零す。
それでいい。それでこそ栄光ある帝国軍だ。ここに集まった者達は身分も立場も其々異なる。だが共通しているのは弱肉強食の世界を勝ち抜いてきた、優秀で忠誠心が高い猛者ということだ。

「閣下、発言をお許しください」

「オールドカースルか、許す。言ってみろ」

「政府軍と事を交える前に、我等が大義のために戦っている事を世界に示すため、第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニア陛下の御葬儀を執り行っては如何かと」

「ほう」

「先帝ルルーシュ皇帝の時代、シャルル陛下の御葬儀は執り行われておらず、それは現政権も同様です。ここで我等が行われていなかった葬儀を執り行い、シャルル陛下の偉業と功績を称え懇ろに弔うことにより、我等は確固たる大義名分と正義を手に入れる事が叶い

ます」

現政権は嘗ての侵略戦争はシャルル及びルルーシュ皇帝の個人的暴走、という立場をとっている。それ故に現政権は大っぴらに悪逆皇帝ルルーシュは元より、ブリタニアという国を建てなおした皇帝でもあったシャルルの葬儀も大々的には執り行っていない。

下手にシャルルの葬儀を大々的に行えば、今後の外交などに支障をきたすと考えたブリタニア政府の見解は正しいが、こうやって逆襲戦争を引き起こしたレナードにとってはこれは十分に役に立つ。

「良かろう。オールドカースル、貴卿の進言を認める。葬儀の件は卿に一任する」

「イエス、マイ・ロード」

「さて、他に何か意見は……ないな。では」

レナードが指を鳴らすと三人ほどの従卒達が入室してくる。

手に持つ盆には中身の注がれたワイングラスがシャンデリアの光を反射し妖しく煌めいていた。

従卒達はそのワイングラスを将軍たちに順々に渡していく。

「陛下より、私の誕生日にと下賜されたものだ。戦の前祝に卿等にも馳走しよう」

従卒が最後にレナードにグラスを渡した。

そして将軍たちの名前を一人一人、まるで胸に刻むように言っていく。

「ポーロ・ブールジーヌ大将」

「はっ！」

オレンジに近い赤髪の３０代後半の将軍が応じる。
ＥＵ戦線などで多大なる功績をあげた名将で、伯爵家の出身。死なずとも後一年もすれば元帥号を手に入れるであろう男だ。

「ヒーデル・エッフェンベルク大将」

「は！」

白髪の男性が返事を返す。
この中で唯一の一兵卒からの叩き上げであり、質実剛健の指揮に定評のある老将軍である。

「ユアン・オールドカースル大将」

「はっ」

愛も変わらず鉄仮面の総参謀長が感情を見せぬ返事をした。
戦術・戦略よりも謀略を得意とする男で、レナードの知恵袋も兼ねている。

「クリストファー・ロックベル中将」

「はい」

軍人とは思えぬほど身長も低く、まるで少女のような顔立ちをした青っぽい髪の若手将校が応えた。
年は若干２５歳。ラウンズであるレナードとライを除けば、将軍

たちの中でも最年少。だがまるで少女のような外見とは裏腹の苛烈な指揮っぷりでも名をはせている。

「アンジェロ・ベルナルデリ中将」

「はッ！」

黒髪の如何にもな生真面目そうな軍人が応じる。
印象と同様、生真面目な男で、前線よりも後方勤務に才覚を発するタイプの人材だ。

「エヴァン・グレイ中将」

「応ッ！」

黒人の筋肉隆々と形容するのが適当な大男が、やはり外見に似合う大きな声で返答した。
彼の家は六代前からの軍人の家系であり、元帥を二人も排出したことで有名である。彼自身も優秀な指揮官で、やや短気だが部下には優しい男だ。

「グスタフ・ヴェルター中将」

「…は」

スキンヘッドのまるで僧侶のような長身の男性が、どことなく浮世離れした発音で答えた。
余り自発的に喋ろうとしない無口な男だが、大の猫好きであり実家は猫王国となっているらしい。

「セルブロ・バジェステロス中将」

「はっ！」

何処かおどけた様に応じたのは、これまた目が覚めるような色男だった。輪郭の整った鼻や形の良い耳。なにより深い翠色の瞳はそれだけで女性を蕩けさせる武器となるだろう。レナードに勝るとも劣らぬ好色家であり、抱いた女の数はもう直ぐ四ケタに届くとは本人の弁だ。

「ニック・ジャック・ウィルソン中将」

「はッ！」

インディアンを先祖に持つ、猛々しい男が返答する。獰猛な戦ぶりで名をはせており、敵からも味方からもハイエナのニックと畏れられる男だ。ちなみにこの『ハイエナ』というのは戦争での指揮っぷりからではなく、上官の妻と浮気したのがバレたからだという異説がある。

「アルベール・カーン中将」

「はい」

カーン中将は将軍たちの中で唯一の『男色家』でもある黒人の男性だ。噂だとウィルソンのことを密かに恋い焦がれているが、当のウィルソンにそちらの気がないので片思い状態らしい。

「ナイトオブツー、ライ・ランペルージ少将」

「はっ！」

そして最後に、レナードの後釜として黒いマントを受け継いだ少年。レナードを含めてこの中では最年少であり、ある意味において最年長でもある少年が鈴のように心地よく返事した。

「戦争は厳しいものとなるだろう。敵は今までのような衆愚政治に毒された弱兵でも、烏合の衆の連合でもない。つい数年前は我々の戦友であり友人であり部下であり上官であった者達だ。同じブリタニアの戦士だ。惰弱ではない真の強者達、戦いは嘗てない程に凄惨で壮大なものとなるだろう。ここに集った卿等のうち何人かは死ぬことになる。或いは……この私が、死ぬかもしれない」

『……』

「故に今日は乾杯しよう。嘗ての戦争で死んでいった者達に。これから死んでいくだろうブリタニアの勇者たちに。死にゆく運命を背負ったかもしれぬ卿等と私に。そして卿等に神の加護があらんことを」

場に集った者達がグラスを掲げる。

「乾杯（プロージット）！」

『乾杯（プロージット）ッ！』

一息で中身を飲み干すと、一斉にグラスが地面に叩きつけられる。決戦の火蓋は切って落とされた。

SECRET13　乾　杯（後書き）

なんというか単に乾杯しただけで一話が終わりましたw
というかキャラが一挙に増えましたね。そろそろ決戦に入れそうです。

SECRET14　独裁者

――――並はずれた天才は凡人を考慮する必要はない。
思えばそれがレナード・エニアグラムであった。この世界の人間を天才と凡人の二つに分けるとすれば、レナードは天才に属するだろう。およそ人間が持ちうる全ての才能をもち、どのような道でも超一流になれる弱肉強食と不平等を是とするブリタニアが生み出してしまった、神童を超えた怪童。だからこそレナードは民主主義を否定せざるを得ない。自由と平等の民主主義と、大衆の平均から隔絶した天才は決して相容れないのだから。

レナードとの交渉が決裂した後、次に閣僚達の脳裏に芽生えた問題とは『誰をレナードに当てるか』であった。相手はブリタニアどころか世界に名を轟かせた将軍にして、個人の武勇においても最強を誇るレナード・エニアグラム。凡百の将軍に迎撃させたとて、凡百の死体となって戻ってくるだけであろう。
だが時間が掛かると思っていた会議は、実際にはそれほど長引かず直ぐに終わった。
『代表、此度のレナード・エニアグラムの挙兵は以前帝国宰相の地位についていた私にも責任があります。この私に、全指揮をお任せ

しては頂けないでしょうか』

このシュナイゼルの意見が出ると、閣僚達はこぞってこれに賛成した。結局、過半数以上の閣僚があっさり賛成したので、シュナイゼルの提案通りとなったが、その決議を眺めていたナナリーは、溜息をつくのを我慢しなくてはならなかった。

これも現在の政権が抱える問題の一つ。

帝国宰相シュナイゼルの実力と実績は国民の誰もが知っている。閣僚達にもそこそこ有能な者達はいるが、やはりシュナイゼルと比べれば劣る。閣僚達自身もそれをよく自覚しているからこそ、シュナイゼルの意見を全面的に正しいと『妄信』してしまう。勿論、相手が元皇族という遠慮もあるだろうが、そんなものを抜きにしてもシュナイゼルは優秀過ぎる。

これでは過去から現在の民主制に移行した意味がない。

ナナリーはシュナイゼルが優秀なのを否定するつもりはない。それどころか閣僚達の誰よりも、シュナイゼルを正しく評価しているだろう。

だがもしシュナイゼルが裏でよからぬ事を考えていたとしたら、一体どうするというのだ。これは閣僚達の中でナナリーしか知らぬ事だが、シュナイゼルには『ゼロに従え』というギアスが掛かっているので、決して独自の判断で動いたり野心をもったりなどすることはない。だがこれがもっと別の、ギアスの掛かっていないシュナイゼルや、シュナイゼルでなくとも危険な思想を持つ者だったらどうすればよいのだ。

妄信は崇拝にも繋がる。

シュナイゼルがブリタニア乗っ取りを狙う極悪人だったと仮定し

よう。閣僚達はシュナイゼルのことを全面的に信じ、その決定に流されてしまうから、シュナイゼルが帝政を復活させ独裁者となるのを誰も止められはしないだろう。

それでは駄目なのだ。

絶対君主制や独裁制というのが、頂点となる君主が優秀である限り、最も効率的な政治体制だというのはナナリーにも理屈としては分かる。だが独裁制というのは、独裁者の蛮行を防ぐ機能に乏しい。嘗ての桀紂の例を見れば分かるように、一人の暴君の暴走は自然災害にも勝る被害を及ぼす事がある。

立憲君主制までは許容できる。だが完全な絶対君主制にするのは躊躇われる。

同時に戦争が起こり、無辜の民衆が死ぬのは辛い。

戦争を回避する手段はある。難しいことではない。ナナリー・ヴィ・ブリタニア代表の名のもとに帝国軍に全面降伏してしまえばいいのだ。

あのルキアーノ・ブラッドリーでもあるまいし、レナードやそれに従う者達も数年前までの同胞と好き好んで戦いたいとは思わないだろう。もしナナリーが降伏すれば、ナナリーやシュナイゼルにコーネリアは元皇族であるし酷い扱いはしないだろうし、閣僚達にもそれなりの地位を与えるのは自明の理だ。ナナリーが決定すればシュナイゼルもそれに倣う。閣僚達もやはりそれに従ってしまう。それで終わり。戦争は回避される。

だがそれは出来ない。

仮に戦争が回避できるとしても、弱者を平然と侮蔑し弱者であることが罪とされる『厳しい世界』たるブリタニアに戻るのは駄目だ。

結局、戦争をもう未然に回避するなんていうのは出来ないのだろう。
だから戦うしかない。
ナナリーはナナリーの、レナードはレナードの。
お互いがお互いに別々の異なる正義を掲げ、そして殺し合う。
絶対善が存在しないように絶対悪も存在しない。
レナードにも善があるし悪がある。ナナリーにも善があるし悪もある。
もし善悪が定まるとしたら――――――――――敗者が悪となり、勝者が正義となるだろう。

これが戦争。
最も非効率的な外交手段。
亡き父やシュナイゼルが別々の異なる方法で排除しようとした、人間の生み出した愚の骨頂。
昔、今は亡き亡父は世界に戦争を引き起こし覇者となった。今は亡き母は戦争を駆け抜け伝説となった。今は亡き最愛の兄は、この戦争が渦巻く世界に飛び込み神話となった。
今度は自分の番。
シャルル・ジ・ブリタニアとマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの子にしてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの妹。ナナリー・ヴィ・ブリタニアの戦争だ。

ゼロの執務室に新生政府軍の将校の制服を着こなした女性が入室してくる。
高貴さと獰猛さを兼ね備えた、どことなく愛嬌を感じさせる顔立ち。女性でありながら不思議と男性的な魅力もある。

『元ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム卿。今日はよく来てくれた』

変声機越しのくぐもった声が鳴る。

こうして直接対面するのは何時以来だろうか、と仮面の下でゼロは思う。ノネット・エニアグラム、面倒見の良い彼女には自分が枢木スザクだったころに何度か世話になったことがある。同時にＫＭＦでの模擬選でも色々と世話になったが、それは今は関係ない。

「呼んだ理由は想像がつく。やっぱり弟のことかな、ゼロ」

『そうだ。貴女には色々と聞きたいことが――――――』

「レナードを説得しろ、という事なら無理だ。あいつの戦い方から勘違いされ易いんだが、私の弟は私以上に、もしかしたらラウンズの中でも一番誇りと矜持の高い男だ。一時の恥が帝国の再建に繋がるならまだしも、政府に降って安楽に生きるなんてあいつは認めないし享受しないだろう」

『……安心していい。その件ではない』

ゼロ自身、レナードが今更降伏するだなんて思えなかった。

ルルーシュほど付き合いは長くないが、レナードはある意味生徒会の皆よりも長い付き合いの友人である。だから少しは分かる。

レナード・エニアグラムという騎士は卑怯な戦術も平然と実行するので、騎士道精神なんて欠片もないような男に見える。だがそうではないのだ。レナードの騎士道精神はないのではなく、他とは別の所に重点をおいているだけだ。つまり『忠誠』と『結果』。あらゆる戦場において最上の戦果を叩きだし、皇帝に忠誠を誓い事こそ

がレナードの矜持の原点だ。そんな男にそのうちの片方を放棄して、安穏と生きろなんて言っても了承するはずがない。
ナナリーの提示した和平案が決裂した時点で戦争は不可避。ゼロはそう確信していた。
「なら私がレナードの所に行かないか心配してる。そうだろう？」
『……』
図星をつかれた。
こう見えてノネット・エニアグラムは決して武勇だけではない。機転が非常に利くし何よりレナードの姉だけあって異様に勘が良い。
しかし例え相手にこちらの意図がばれていてもゼロのすることは変わらない。
レナード率いる帝国側には多くの人材が集まっている。
ここに更にノネット・エニアグラムが組するような事があれば、不味い事になると言わざるを得ないだろう。
現在の政府軍と帝国軍との戦力比は軽く見積もっても６：４。ただ帝国側はまだ軍の再編などに時間を取られるので実質的にはもっと少なくなるだろう。だが人材という面ならば帝国と政府側に差はない。いや僅かに帝国側が上回っていると言っていい。ここに更にノネットのような優秀な人材を帝国側に加わらせる訳にもいかないのだ。
『エニアグラム卿。貴女は――――――――――――』

帝国暫定首都『カルデュエル』から全世界に向けて、その映像は流された。
それは盛大なる葬儀の光景。
飾られし写真は世界を震撼させたブリタニアの第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニア。
中華連邦の天子と星刻が、
キョウト六家の筆頭たる皇神楽耶が、
そしてゼロが、
この映像に一つのデジャヴを感じていた。
前にも同じような光景を見た覚えがある。
そう。あれは第三皇子クロヴィスが死した時。
もしかしたらあの演説は、皇帝シャルルからの未来の英雄ゼロに対する宣戦布告だったのかもしれない。今回、檀上に上がるのはシャルルではない。彼の騎士だった男。レナード・エニアグラム。フレイヤの影響で負った大火傷も再生治療を受けたらしく跡形もない。端正な顔立ちの青年が壇上に立つ。
だが役者が変わったとはいえやはり、今回も葬儀は宣戦布告と同じ意味をもつのだろう。
流れる荘厳なる音楽は、あの時と同じブリタニアの国歌。

『我々が今宵、弔った御方は英雄である。
その偉大なる英雄シャルル陛下を卑劣にも害し、皇帝を僭称した悪逆皇帝ルルーシュは帝国の尊厳を踏み躙り、暴虐のままに振る舞った。
これが他国人によってであるとはいえ討たれ斃れる事に、私はなんの異論も反対ない。
簒奪者たる悪逆皇帝ルルーシュが討たれるは謂わば歴史の必然であり、当然の結果であるからだ。
だが！　悪逆皇帝ルルーシュが死んだのならば、ルルーシュにより捕えられた皇族方は新たに第百代皇帝に立つ義務があった！

ナナリー、シュナイゼル、コーネリアの三殿下は怠られたといっていいだろう！
いいや、それだけではない。三人は皇族としての義務を放棄しただけに飽きたらず、ブリタニアの伝統と文化を破壊し尽くしたルルーシュと同じく、皇室と帝政を破壊し自由と平等を謳う民主制への移行を宣言した！　私はこれに異論を申し上げたい。「なんだこれは」と！

そもそもＥＵなどを筆頭とした民主主義国家は民主主義こそを至上の国家体制とし、帝政を敷く我が国を批判するが、それは完全なる誤りである！　民主主義における政治家とは国家のための政治ではなく、選挙のための政治をする政治屋であり、民主主義とはそういった愚劣な政治屋を生む土壌になる衆愚政治なのだ！　思い出してみ給え、臣民よ！　民主主義と自由と平等を賛美したＥＵは、帝政を敷く我が国の前に成す術もなく惨めな敗北を続けた。これは民主主義が自由を語る衆愚政治だという証といえるだろう。
思い出せ！　中華連邦、ＥＵ、そして超合衆国。あらゆる国々が我が国を否定し立ち塞がったが、その全てが等しく我が国の前に敗れ去ったのだ！

第九十九代ブリタニア皇帝ルルーシュを倒したのは国家でも体制でもなければ、軍事力でも正々堂々でもない。暗殺という卑劣なる方法によってである！
この確固たる事実こそ、神聖ブリタニア帝国こそが世界最強たる国家である紛れもない証明であり、我がブリタニアこそが最上の国家たる現実だ！　そして最上の国家たるブリタニアの臣民たる諸君等こそ、全人類の中でも選ばれし存在だというのは自明の理。
にも関わらず、現政府はサクラダイトの利権欲しさに犬のように尻

尾を振り、民主政治の皮を被った衆愚政治への移行を宣言した！
何故だ。何故歴史の勝者たる我々が、僅か一か月でブリタニアの前に膝を屈した脆弱国家日本に頭を下げねばならないのかッ！

私、レナード・エニアグラムは。第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニア陛下の忠実なる騎士として、ブリタニア全臣民と正義のために幼いながらに立ち上がって下さったメリエル・レイ・ブリタニア唯一皇帝陛下の臣下として、逆賊ナナリー率いる現ブリタニア政権に対し宣戦布告することを宣言する！
帝国臣民よ。正義は我が旗にこそある！
勇ある者は剣をとり戦い、知ある者はペンをとり歴史を記せ。全ての帝国臣民は覚えよ。
皇歴２０２２年。
この年は、ブリタニア復活記念日として輝かしい戦果と共に永久に刻まれるだろう！
オール・ハイル・ブリタニアッッッ！！！！！

『オール・ハイル・ブリタニアッ！』
『オール・ハイル・ブリタニアッ！』
『オール・ハイル・ブリタニアッ！』
『オール・ハイル・ブリタニアッ！』
『オール・ハイル・ブリタニアッ！』
『オール・ハイル・ブリタニアッ！』

SECRET14　独　裁　者（後書き）

なんというか、レナードよ。お前は何処の総統閣下だ、と言いたくなる回でした。
レナードが痛烈に民主主義を批判しましたね～。まぁ反骨精神旺盛な人間ではないので、民主主義国家に生まれても独裁者になったりはしないでしょうが。仮定の話ですが日本に生まれてたら普通に日本軍人になってたでしょうね。民主主義は嫌いだけれども。
さ～て、レナードがガンダム的に言うならシロッコとかギレンとかハマーンになってるところで、決戦が近付いてきました。というかこの話、最初の一話以外は全然戦ってませんねw
そろそろ戦わないと……。

SECRET15　悲しき　戦略

――――親は根、子は枝葉。
子は産めば幾らでも得られるが親は失えば得られない。日本においては子供を親が守る方が当然であるが、国によっては子供が親に尽くすのが当然という思想もある。思想とは単一のものではあらず、どれが絶対に正しいかなど分かる筈もない。ただ言えるのは相手が根だろうと枝葉だろうとレナードが決して手を抜かないという事だ。

「いやはや壮観ですな、総帥閣下」
エッフェンベルクが整然と並ぶ浮遊航空艦を眺め言った。
「これ程の艦隊を動かせないようでは、歴史を動かす事は出来んよ」
レナードは憮然とこれに応じる。
「なにより戦艦を揃えても扱う人間が無能では宝の持ち腐れというもの。勝敗はこれらの戦艦以上にそれを扱う貴卿にも掛かっている。期待しているぞ、エッフェンベルク」

「イエス、マイ・ロード」

「だが……こうも戦艦が並ぶと一曲かけたくなるな。ドヴォルザークの『新世界より』でも流そうか」

「私見ですがボレロも宜しいのでは？」

「ふむう。――――――――それも良い。ただ時期が時期だ。目的も目的だ。ここはクラシックでもなく我が国の国歌が相応しいだろう」

「現在の政権を破壊し、嘗て以上のブリタニアを復活させる為の尖兵。確かに、我が国の国歌こそがこの艦隊に捧げる曲に相応強いでしょうな」

「卿もそう思うか？」

しかしここまでに至るまでの道のりは長く険しかったとレナードは回想する。資金源は先々帝の隠し財産によりどうにかなったし、元貴族からの資金提供もかなりのものだった。如何に貴族の地位を剥奪されたとはいえ、貴族からその財産全てが奪われた訳ではない。

古来より『王』となるには三つの力が必要といわれてきた。

即ち権力、財力、暴力。

先ずレナードは財力を手に入れ、それを元手に更に財力を蓄え、その次に『皇帝』という権力を見つけ出した。数多いる皇族の血をひく皇帝候補から、より成功しそうな人物を見つけ出し、そして擁立する。言うだけなら簡単だが、そんなに簡単な話ではない。現にメリエル以外の何人かの皇帝候補からは提案を拒否されてしまった。

それでもどうにかメリエル・レイ・ブリタニアという皇帝を見つけ出し、それを擁立することでレナードは正当な大義名分のもとナイトオブワン、軍総帥、帝国宰相という権力を手に入れた。

そして現在。

レナードは『王』として必要な最後の力。

暴力を手に入れた。

誤解なきように言うが、レナードはメリエル・レイ・ブリタニアを廃嫡し自らが皇帝となる算段など毛頭ない。ただ事実上の『王』としての力が必要だった。自らの才覚を自在に発揮できる場所がなければ、到底この逆襲戦争は成功しないだろう。

レナード・エニアグラムは自分にも自分以外に対しても能力を過大評価もしないし過小評価もしない。レナードは自分自身の能力の高さを正しく認識していたし、相対するであろう敵の能力も正確に理解していた。

コーネリア・リ・ブリタニアとシュナイゼル・エル・ブリタニア。共にブリタニア繁栄の時代を彩った皇子・皇女達であり、皇族の中でも1、2を争う才覚の持ち主。

二人は強い。

主任からの報告によるとシュナイゼルはギアスに掛かっているらしいので、臨機応変即断即決が必要とされる全軍の指揮をとることはないだろうが、後方で戦略眼を発揮する分には多少の思考の遅れなどは関係がない。またシュナイゼルの恐ろしい所は敵の内部分裂を誘い戦う前から敵を自壊させることにある。話では『黒の騎士団』もこれにやられ、あっさりと崩壊したらしい。

そしてコーネリア・リ・ブリタニアに至っては親衛隊時代の自分

の上官である。コーネリア、ダールトン、ギルフォード。あの三人に揉まれた経験がなければ、現在のレナード・エニアグラムはなかっただろう。言わば自らの師。

能力も非常に高い。コーネリア・リ・ブリタニアという女性はシュナイゼルのように戦艦内で指揮をするのではなく、自らも最前線にたち全軍を鼓舞するというまるで女版アーサー王のような戦い方をするが、そのことはコーネリアがＫＭＦの腕前でも超一流だという証明でもある。

また指揮能力も高く、戦略ではなく戦術面ならば決してシュナイゼルやルルーシュにも劣らないだろう。正々堂々の戦いを好む気性もあり、奇襲は好まないが、それは好まないというだけで使わない訳ではない。必要とあれば奇襲だろうが奇策だろうが使う。

兵の指揮ではこちらが上。

だがそれは最悪一度の敗北で崩れかけない。

貴族達がレナードを支持する理由など簡単だ。

レナードが戦場で一度も敗北しておらず連戦連勝を重ねてきた『常勝無敗』の看板と、単機で戦略を覆してきた『最強騎士』としての看板の両方を信用しているからだ。決して信頼ではない。一方の看板が破壊されれば貴族連中が政府側に寝返る事も大いに考えられる。内部分裂とはシュナイゼルの常套手段の一つでもあるのだから、こちら側の不和は決して見逃さないだろう。

そんな折である。

出撃の準備を進めるレナードのもとに、一つの報告が入った。

「父上が一軍を率いて援軍に来ただと！？」

報告に来た兵士が頷く。

「はっ。先程そう連絡がありました！　エニアグラム公爵は自領と周辺貴族の兵を纏めその数はおよそ四十万！　近日中にはこの基地に御到着される予定と！」

「……その援軍の中に姉上……ノネット・エニアグラム卿はいるか？」

「いえ、そういう話は聞いておりませんが」

「よし。下がってよい」

「イエス、マイ・ロード！」

レナードは部下達を見やる。

誰もがエニアグラム公爵来援の報に沸き立っていた。無理もなかろう。エニアグラム公爵はレナードの父というだけでなく退役したとはいえ元帥号を得た人物である。それが四十万もの大軍を率いて来るというのだから興奮しない方が可笑しい。

だがそうでない者も何人かいた。

ライとオールドカースルの二人である。

「総帥。申し上げ難いのですが……もしかしたら罠では？」

ライがオールドカースルの意見を代弁して言った。

すると将軍達がそれに反対する。

「ランペルージ卿の申し上げた事も尤もですが、エニアグラム公爵は長年ブリタニアに仕えた貴族で、なにより退役したとはいえ元帥号を授与された人物。なにより総帥閣下の御父君であらせられます。

罠と言うのは考え難いのでは？」

ロックベル中将が反対意見を述べる。

「待て待て。ランペルージ卿の言われたことも一理ある。そう言われてみれば、総帥閣下の姉君であらせられるノネット・エニアグラム卿は共にいないという。もしエニアグラム公爵が我が帝国の援軍にはせ参じるというのであれば、ノネット・エニアグラム卿も同伴でないのは奇妙であろう」

次期元帥間違いなしとまで言われたポーロ・ブールジーヌ大将がライの意見を受けてそう発言した。ブールジーヌと言う男は単に有能だけでなく、こういう部下同士の意見を纏める事にも能ある人物だ。もしも戦争が終わった後生き残っていれば次代のブリタニア軍を背負う人物となるだろう。

「閣下。ブールジーヌ大将、ランペルージ卿、ロックベル中将。御三方の意見のどれにも一理がございます。その上で閣下はどのようにお考えなので？」

将軍達の中で一番公私共に品行方正なバジェステロス中将がレナードに意見を求めた。

「私は父上……いや、エニアグラム退役元帥が援軍に来たのは嘘ではないだろうと考える」

「その根拠は？」

「姉上が来ていないことだ。知らぬ者もいるだろうから説明するが、我が姉上とコーネリア皇女殿下は昔からの友人。親友と、言い変え

ても良いだろう。姉上がコーネリア殿下を裏切り私につく訳がない。だがもし敵の策謀だとしたら疑われる要素がないよう、例え共におらずとも姉上がいるように報告するだろう。先程の報告では姉上は来ていないという。姉上はナイトオブナインという立場、まさか父上が報告し忘れるということもないだろう」

「ではノネット・エニアグラム卿は政府側に組すると？　申し上げ難いことですが、総帥閣下はノネット・エニアグラム卿の弟君であらせられる。如何にコーネリア殿下が親友とはいえ、弟を討つというのは……」

「それは違うぞ、エッフェンベルク大将。姉上は親友と弟が敵同士になったからといって、どっち付かずに静観を決め込む軟弱者ではない。姉上は現政権の軍において重職についている。ならば職務に従い、この私を殺しに来るだろう。一切手を抜かず、全力で」

「成程」

もう他に意見する者はいない。

だが出陣を前にして幸先の良いことだ。四十万の軍勢もそうだが、父であるジェームズ・エニアグラム公爵は元帥号を授けられたほど優秀な将軍でもある。大軍と名将、その二つが一気に加入する。

実に幸運なことだ。だが、

「本当にそうでしょうか？」

レナードの結論に否と発言する者がいた。

「オールドカースル……卿は何か意見があるのか？」

「シュナイゼル元宰相は優れた戦略家です。恐れながら、総帥閣下がそのように決断することを想定して、敢えてノネット・エニアグラム卿を同行させていないように見せかけた可能性があります」

「考え過ぎではないか？」

「相手はあのシュナイゼル元宰相です。考え過ぎて悪いという事はありません。もしエニアグラム公爵が敵の密命を受けていたとして、あっさりと迎え入れた所で背後から撃たれれば我が軍は崩壊します。それだけではありません。エニアグラム公爵は総帥閣下の御父君。これが背後から撃ってきたとなれば、貴族から兵士までの閣下への支持が消えてなくなる可能性すらありえるのです」

「ならば、どうしろと？　まさか父上に先制攻撃を仕掛け壊滅せよとでも申すのではないだろうな？」

「勿論、違います。そのような真似をすれば、援軍を撃ったとしてシュナイゼル宰相が内部分裂をさせる隙を生じさせる事になりますし、味方を撃った総帥に部下はついてこないでしょう。ここは一時的、基地が受け入れる用意を整えていないと申して、一旦エニアグラム公爵には他基地にて待機なさって貰うのが良いでしょう」

そして休んでいる艦隊に密偵を派遣し調査をさせれば良い。

オールドカースルはそう締めくくった。

暫し黙考する。

レナードとて血も涙もない冷血ではない。姉や親に対する情はあるし、その時が来れば躊躇いなしに剣を振るえるが、好き好んで親や姉に刃を向けたいと思う筈もない。

だがオールドカースルの言う事にも理がある。もし仮に父を受け入れ、それがシュナイゼルの謀略だとすれば、帝国にとって戦略的

にも戦術的にも致命的な隙となるだろう。

「……良かろう。卿に任せる」

「イエス、マイ・ロード」

そして場は一端解散する。

諸将の中にはオールドカースルを「臆病」だの「心配性」などという声が多々見られた。

数時間後。

暫定首都の北にある基地がエニアグラム公爵率いる軍によって陥落したという報が入る。

父と子。

悲しい決戦の幕が開こうとしていた。

SECRET15　悲しき　戦略（後書き）

さ～て、外伝だとレナードが徹底的に苛められてますね。本編も似たり寄ったりですがw　フレイヤに焼かれ、起きたら国や戦友が滅んでいて、次には親子での殺し合い。……レナードの明日の未来はどっちだ！

SECRET16　?き　矜持

――――敵として目の前に立ち塞がるのならば、敬意を払い全力をもって相対せよ。
レナードが父から言われた言葉である。勿論これには戦場で決して油断はするなという意味合いもあるが、同時に素晴らしい戦をした敵には敬意を払うと言う、奇妙なスポーツマンシップ、或いは騎士道精神のようなものを感じさせる言葉でもあった。

暫定首都『カルデュエル』より北方に位置するレグルート基地陥落の報は、一気に首都にある帝国軍中に駆け巡った。
そして基地を陥落させたのがエニアグラム公爵であることが知れ渡ると、今度は総帥であるレナードへの不信の声も出始める。
総帥は敵と内通しているのではないか？
これは全て政府軍とレナードが共謀したことであり、謀反者を誘い出す罠なのではないか？
憶測は憶測を呼び、無視できない者にまで成長していく。
総帥たるレナードは即急に、これに対応しなければならなかった。もし放置しておけば、暴発し内部から瓦解することもあり得るだろうから。

「……諸将よ。オールドカースルの進言は正しかったようだ。我が父は味方ではなく敵軍。我等に策謀が見透かされていると見るや、レグルート基地をたちどころに陥落してみせた」

「総帥。なにもそう深刻になる必要はないでしょう。エニアグラム公爵が敵に回ったのは俺としても残念ですが、所詮は四十万！　我が軍の総力をもって相手すらば敵にはなりませんっ！　この上は、このエヴァン・グレイに先陣の栄をお授け下さい！　エニアグラム公爵率いる軍を壊滅させ、その身をここまで引き摺って参りましょう！」

「グレイ提督。卿の意見は勇猛果敢で良いが、我等が全軍をもって我が父――――ジェームズ・エニアグラム公爵を相手している間に、政府軍が首都を攻撃してきたら如何とするか？」

グレイ提督が沈黙する。

そのタイミングを見計らってか、今度は総参謀であるオールドカースルが発言した。

「密偵の報告によればコーネリア元帥率いる政府軍が出陣の用意を進めているとの報告が入っている。我々がエニアグラム公爵討伐のため軍を動かせば、コーネリア元帥率いる軍隊はここぞとばかりに首都へと進軍してくるだろう」

「なにも全軍で出撃する事もないでしょう。聞くところによればエニアグラム公爵率いる軍隊は四十万。三個艦隊を向かわせれば十分。その間に残った者達でコーネリア元帥を相手すればいい」

バジェステロスの意見にスキンヘッドのヴェルターが頷く。

二人は同意見のようであった。

「しかし兵力の分散は愚策と思います。唯でさえ私達は数において政府軍に劣っているのです。貴族の私兵も合わせれば数を増やす事も出来ますが、馬の群れに亀を入れても邪魔にしかなりません」

冷静に意見を述べたのは女性のような顔立ちをしたロックベルだ。彼の言う通り兵力の分散は愚策である。なにより帝国軍は政府軍に数において劣る。貴族の私兵などを合わせれば拮抗するだろうが、ロックベルの言う通り満足に訓練も受けていない兵士を、精鋭たちに混ぜたところで軍が強化されるどころか、全体の弱体化に繋がりかねない。

如何に一兵卒とはいえ、人的資源とはそう簡単には手に入らないものなのだ。然るべき時間と訓練を施さねば兵士は兵士として機能しない。

「卿等の意見は理解した。成程、兵力の分散は愚策だろう。数に劣る我々が更に兵力を分けるなどは愚の骨頂。だがかといって我が父の動きを無視すれば、コーネリア元帥と矛を交えている間に首都をつかれるだろう。首都など如何でもいいというならば兵力を一つに集中させて、返す刀でもう一方を討つという手もあるが、そうもいくまい」

首都には皇帝だけではなく多くの貴族達がいる。

彼等を見殺しにすれば彼等からの支持は失うだろうし、首都が陥落したとなれば帝国軍全体の士気がガクッと落ちる。全軍が崩壊するほど。

首都を守りきる。二方向から進軍する政府軍を撃退する。

両方やらなくてはならないのが、独裁者の辛い所だった。

「かといって我が父相手に三個艦隊程度で完全に撃滅できるかと問われれば、それも疑問だ」

「何故です？　三個艦隊を用いれば数では完全に圧倒できますが？」

この中で最年長のエッフェンベルクが尋ねる。

「……ナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム卿の存在」

今まで発言しなかったライが唐突に口を開く。

「ノネット・エニアグラム卿の不在が総帥を騙す作戦だとすれば、本当はノネット・エニアグラム卿が公爵と共にいる可能性は低くない。そしてラウンズは根底の戦術や戦略を単機で引っ繰り返す力を持っている。三個艦隊だけなら、逆に返り討ちにされる可能性も」

「ありえますな……。私も何度かラウンズ方が参戦した戦場に立ち会った事がありますが……その」

「出鱈目、だったか？」

「はい」

エッフェンベルクが頷く。

たった一機のＫＭＦが戦局を逆転させる。そんな映画みたいなことを現実でやってしまうのがナイトオブラウンズという怪物たちだ。エッフェンベルクのような真っ当な指揮官からしたら、こんなに無茶苦茶な存在はいない。あのルルーシュも、ランスロットというイレギュラーに初めて相対した時に憤りを隠せないでいたのだ。それだけラウンズ級の怪物は異常なのである。

「既に分かっただろう。エニアグラム公爵――――父上率いる軍を確実に叩き潰すならば、私かランペルージ卿の参戦は不可欠だろう。いや更に万全を期すなら、私とランペルージ卿が向かった方が良いだろう」

「し、しかし……。御二方が抜けられれば首都は」

「そうだ。この戦、時間は掛けられない。私自ら高速艦を率いて我が父を――――――ジェームズ・エニアグラム公爵を討つ！」

「父君と、戦われるのですか……？」

恐る恐るロックベルが尋ねる。

「無論だ。立ち塞がるのならば、それが最愛の姉だろうと尊敬する父であろうと私の敵だ。ここに一つの例外もない」

堂々とそう言い放つと諸将も黙り込む。

親殺しの禁忌。

それを犯そうとしているレナードに迷いはない。

「我が旗艦アースガルズにブールジーヌ、オールドカースル。そしてバジェステロス、ブールジーヌ、グレイは共に。首都防衛の総司令官はエッフェンベルク大将に一任。ロックベル、ヴェルター、ウィルソン、カール、そしてランペルージ。貴卿等はエッフェンベルクの指示に従え。ただ一つ忠告しておく。貴卿等の役目はあくまでも防衛だ。コーネリア元帥率いる軍に勝とうと考えるな。ただ守ればいい」

『はッ！！』

「ベルナルデリ、兵站の全ては卿に一任する。補給は軍隊の生命線、頼むぞ」

「イエス、マイ・ロード！」

「宜しい。では出陣する、遅れるなっ！」

『イエス、マイ・ロードッ！』

空は澄み切っていた。

暗く沈む自らの心の内とは対照的に、どこまでも青い。

「公爵、宜しいのですか？　御子息と、レナード様と戦うなど」

家に代々つかえた執事であり公爵の副官でもある初老の男性が尋ねる。

軍服がまるで燕尾服に見えるのは、彼が日頃どのような職についているかの照明だろう。

「忠誠とは、難しいな……シャルパンティエ」

執事であり副官であり友である男の名を呼ぶ。

「レナードは、息子は帝国に仕えた。だが私は国に仕えた。平時な

ら問題はないが、こういう時にはこうも些細な擦れ違いが大きくなる。レナードが帝国のために剣をとるのならば、私は変わりゆく国のために剣をとる。それだけの、ことだ」

「――――――――やれやれ、意外とナイーブですね、父上も」

涼やかな声に公爵が振り返る。

「ノネットか。良かったのか、何も私に付き合う必要は」

「私の意思ですよ。気にしないで下さい、父上」

親と姉と弟。

この三者が同じ道を歩むことは、もうないのだろうか。

ユーフェミアとルルーシュ。

同じ事を目指していて、一度は手を取りかけた二人が、永久に擦れ違ってしまったように。

運命はこうも残酷で、度し難い。

SECRET16　?き　矜持（後書き）

まぁこうなります。
レナードはあれでプライドや矜持というのがかなり高いので、相手が父親でも引く事はなかったですw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6367w/

黙示録～反逆しない軍人～

2011年10月10日11時34分発行